



2027横浜
国際園芸博覧会

横浜市における計画案の検討状況

第1回目

1. 基本認識
2. テーマ・サブテーマ・事業コンセプト
3. 参加方針
4. 事業運営計画
5. 会場計画
6. コミュニケーション計画
7. 輸送計画
8. レガシー計画
9. 事業費・事業スケジュール

基本認識、サブテーマ、事業コンセプト等を中心に議論

第2回目

1. 基本認識
2. テーマ・サブテーマ・事業コンセプト
3. 参加方針
4. コミュニケーション計画
5. 会場計画
6. 展示・行催事計画
7. 会場運営・管理計画
8. 輸送計画
9. 情報基盤計画
10. 組織・資金計画
11. リスク管理計画
12. レガシー計画

第1回検討会で議論したサブテーマ・事業コンセプト等から具体的な方針を議論

第3回目（3月）

1. 開催概要
2. 事業方針
- 3. 展示・行催事計画**
- 4. 会場計画**
5. 会場運営・管理計画
- 6. 輸送計画**
7. 情報基盤計画
- 8. コミュニケーション計画**
- 9. 組織・資金計画**
10. リスク管理計画
- 11. レガシー計画**
12. スケジュール

※太字は詳細にご説明する項目

第1回、2回での議論を踏まえ、計画市案取りまとめ

1) 事業構造

- ・ 総来場者の検討
- ・ 会場建設費・運営費

2) 基本計画

- 1 全体概略
- 2 展示・行催事計画
- 3 Village（会場全体を使ったコンテンツ展開）
- 4 会場計画
- 5 輸送計画
- 6 コミュニケーション計画
- 7 レガシー計画

1) 事業構造

- ・ 総来場者の検討
- ・ 事業構成・会場建設費・運営費

1) 事業構造（参加者の検討～2027横浜国際園芸博覧会の参加モデル～）

- ・参加者規模：1,500万人以上（ICT活用や広域・地域連携などの多様な参加形態を含む）
- ・有料来場者数：1,000万人以上

リアルな体験・空間演出

- ・園芸や農などの体験を通じて、来場者に人と自然の共生や自然環境の大切さに気づかせ、意識や行動の変容に繋げるため、**リアルな体験の場の提供が重要**
- ・**体験や自然環境の体感に適した会場空間（密度）の設定や演出が必要（1日の来場者10万人）**

ICT（情報通信技術）等の活用

- ・テレワークやオンラインセミナーなど、働き方や暮らし方に変化
- ・芸術鑑賞やイベント等においてもバーチャルなど**ICT等を活用した参加スタイルが進展・定着**
- ・**2050年の社会を見据えれば、オンライン参加等を博覧会への新たな参加方式として位置づけるのが妥当**

あらゆる主体の参加・会場外との連携

- ・多様な主体による連携の取組や、
- ・ボランティアなど、博覧会に関わる**あらゆる主体が博覧会に参加する仕組み**を創出していく
- ・市内外の庭園、企業や個人の庭を巡るツーリズムや、農業体験など、**会場外の庭園や体験型イベント等との連携**に取り組む

1) 事業構造（資金計画の構成）

資金計画の構成

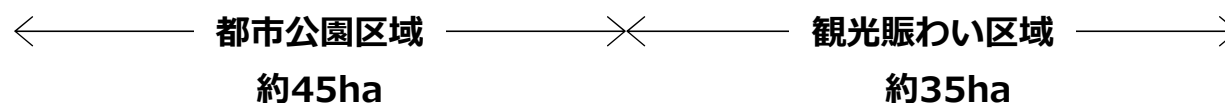
	収入	支出
(1) 会場建設費	・ 国 ・ 地方公共団体 ・ 民間	・ 基盤施設整備費 ・ 修景整備費 ・ 展示館整備費 ・ 観客施設整備費 ・ 管理施設整備費 ・ 施設撤去及び復旧等
(2) 運営費	・ 協会が主体となり実行する事業収入	・ 会場運営費 ・ 事業運営費 ・ 観客対策費 ・ 広報宣伝費 ・ 一般管理費 ・ その他（輸送 etc.）

1) 事業構造（会場建設費）

- 会場の整備の前提となる基盤については、土地区画整理事業及び都市公園事業等により計画的に整備を進め、博覧会事業による会場整備は、演出の修景や出展物の整備等を中心に行う。
- なお、観光賑わい区域に係る2層部分及び工作物等に係る整備については、土地区画整理事業の進捗に合わせ、市が観光賑わい事業と調整して計画的に整備

基盤整備の考え方

3層：造園、演出、 建築、施設etc.	〈博覧会事業〉 演出修景、出展作品、仮設物	〈博覧会事業〉 演出修景、出展作品、仮設物
	〈都市公園事業〉 造園修景、工作物、建築物	〈今後調整〉 造園修景、工作物、建築物
2層：園路広場、インフラ	〈都市公園事業〉 通路、広場、上下水、電気	〈今後調整〉 通路、広場、上下水、電気
1層：造成（土工）	〈土地区画整理事業〉 造成、基幹インフラ	



1) 事業構造 (会場建設費)

- 過去の国際園芸博覧会の施設整備を参考とし、現時点の会場計画案に基づいて試算
- これに加え、新型コロナウイルス等の感染症予防対策や、5G・6G対応などの情報通信・利用者サービス等が必要となる情報通信基盤の整備、建設費・人件費の上昇等の増加要因が見込まれる

会場建設費収支構造

収入		支出	
項目	金額	項目	金額
国 地方公共団体 民間		基礎施設整備費 : 園路、広場の舗装、給排水・電気設備等工事等	39億円
		修景整備費 : 庭園・花壇・緑地の整備等	25億円
		展示館整備費 : 国際展示館、テーマ館、屋内・屋外花展示整備費等	28億円
		観客施設整備費 : 飲食・物販・サービス施設整備費等	46億円
		管理施設整備費 : 管理施設等の整備費等	48億円
		施設撤去及び復旧等 : 仮設施設の解体撤去費等	54億円
合計	240億円 (情報通信基盤等は 含まない)	合計	240億円 (情報通信基盤等は 含まない)

1) 事業構造（運営費）

- ・過去の国内園芸博（A1、Bクラス）の収支構造を参考に、支出項目の割合を検討
- ・花き園芸・造園関係者の参加を得ていくための出展対策費等、事業運営費を多く見込むことが必要
- ・下記に加え、新たな要素として、オンライン参加等の新たな参加形態に対応するためのデジタルコンテンツ運営費等を見込むことが必要

運営費収支構造

収入		支出	
項目	金額	項目	金額
協会事業収入 (入場料etc)	286億円	会場運営費：会場運営管理費、庭園・花壇・緑地の維持管理費等 事業運営費：国内・海外出展対策費、テーマ展示、行催事費等 観客対策費：入場券関係対策費、観客対策費等 広報宣伝費：国内・海外広報費、報道対策費等 一般管理費：諸給与費、一般管理費、AIPH・BIE納付金等 輸送費：駐車場収入、シャトルバス輸送収入等	87億円
付帯事業 (マーケティング事業)	38億円		116億円
その他	36億円		27億円
			30億円
			43億円
			57億円
合計	360億円	合計	360億円

2) 基本計画

- 1 全体概略
- 2 展示・行催事計画
- 3 Village（会場全体を使ったコンテンツ展開）
- 4 会場計画
- 5 輸送計画
- 6 コミュニケーション計画
- 7 レガシー計画

1 全体概略（開催概要）

<具体化に向けた方針>

世界共通の課題解決に向け、2050年を見据えた、人と自然の関わりが「幸せ」となり、主体的な参加を促す社会モデルを、横浜・上瀬谷から世界に発信し、次の文明の先駆けとなる祭典とする

<2027年に向けた時代認識>

地球規模の課題

- ・ 地球温暖化の進展
- ・ 生物多様性の喪失
- ・ 人口増加を賄う食料の確保
- ・ 都市部への人口集中 等

+

国内の課題

- ・ 人口減少の進展、高齢化
- ・ 自然災害の激甚化・頻発化
- ・ インフラの老朽化
- ・ 中山間地域の農地の荒廃 等

+

横浜市の課題

- ・ 生産年齢人口減による税収減
- ・ 産業の都心臨海部への集中
- ・ 郊外部のポテンシャルの活用不十分 等

社会環境変化

- ・ デジタルトランスフォーメーション（D X）進展による「働き方」「暮らし方」の変化
- ・ C O V I D - 1 9 の世界感染拡大による「自然とのつながりの大切さを再認識」する傾向

国の将来戦略

- ・ Society5.0の推進
- ・ グリーンインフラの実装
- ・ 花き園芸文化の振興等を通じた農業・農村の活性化
- ・ 観光立国や地方創生の推進

横浜市の将来戦略

- ・ 横浜市の都市ブランド力の強化
- ・ 都市臨海部と郊外部を両輪とする活性化
- ・ 多様な主体の連携によるグリーンシティの構築
- ・ 観光・MICEの推進、文化芸術創造都市の推進

過去博覧会等の継承

- ・ 過去博覧会（1990年大阪花の万博）の理念の継承と発展
- ・ 2025大阪・関西万博の「継承と発展」と横浜の「独自性」の両輪

1 全体概略（事業構成）

＜テーマ＞ **幸せを創る明日の風景 -Scenery of The Future for Happiness-**

＜サブテーマ＞

自然との調和
Co-adaptation

緑や農による共存
Co-existence

新産業の創出
Co-creation

連携による解決
Co-operation

＜事業コンセプト＞

価値を
再定義する
Revise

多様性に
気付く
Find

行動変容に
繋げる
Change

分かち合う
Share

環境負荷低減を
徹底する
Care

繋がりを広げる
Connect

＜会場コンセプト＞

里山で培われた思想・行動が未来を広げ、花と緑が輝き、人と自然が共に紡ぐ明日の風景

“The Philosophy of Satoyama” opens up the possibilities. “Flower, Greenery, Nature and Human” create ideal landscapes of the future.

庭園

パビリオン

コンペティション

行催事

営業活動

Village

会場計画 会場運営・管理計画 輸送計画 情報基盤計画
コミュニケーション計画 資金計画 リスク管理計画

レガシー計画

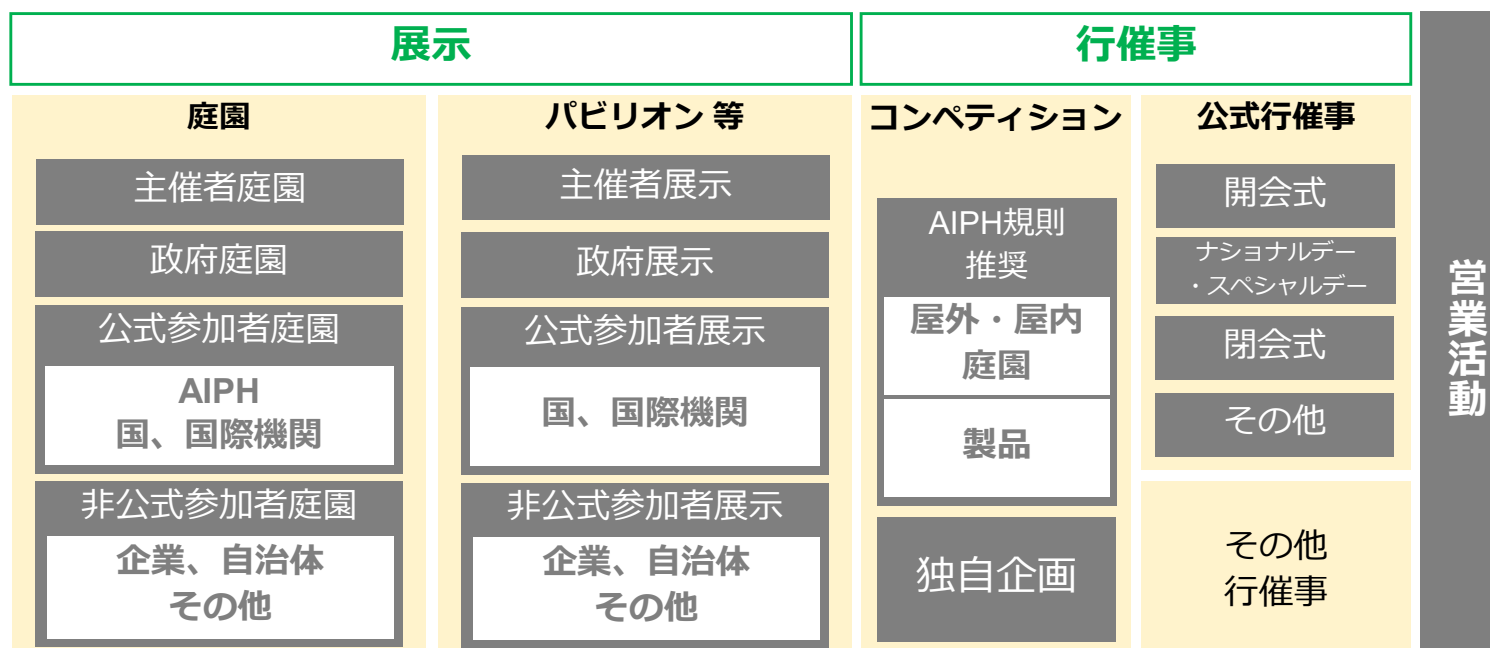
2 展示・行催事計画

- 展示・行催事の各コンテンツでは、テーマ・サブテーマを体現し、事業コンセプトを踏まえた仕掛けにより、参加者に楽しみや驚き、感動などを与え、意識変容、行動変容を促進
- テーマへの訴求力の高い展示、国際園芸博覧会の顔となる国際色豊かな庭園、高品質な花きや各国の魅力的な植物、優れた技術など、多様な展示を展開
- 国際園芸博覧会の意義を示すコンペティション、セレモニーやナショナルデー等の行催事を通じて、花き・園芸を中心とした産業の発展や国際的なつながりを醸成

サブテーマ



事業コンセプト



●庭園

- ・国際園芸博覧会の顔となる庭園について、参加する国、国際機関、花き園芸産業や造園産業、農業等をはじめとした企業や、全国の自治体など、多様な参加者による出展を想定
- ・各国や地域の風土、文化、伝統の違いから、特徴的な庭園が彩り豊かに展開され、春～秋の開催期間を通して楽しめるよう、日本の四季を意識し、地域と連携した植替えイベントや、季節に応じたコンペティションなどを実施

庭園の実施主体		庭園の特徴
主催者庭園	主催者	本博覧会を象徴し、テーマを体現
政府庭園	日本国政府	日本国を象徴するとともに、本博覧会の開催国としてテーマを体現
公式参加者庭園	AIPH	花き・園芸産業の発展、国際的な理解の促進
	国、国際機関	各参加国や国内外の企業などにより、各国の風土、文化、伝統や、花き産業を支える企業の技術など、多様な参加者の特徴を表現
非公式参加者庭園	企業（国内外）、自治体、市民団体 等	

●花き等

- ・国際園芸博覧会の核をなす高品質な花きや栽培植物、各国・各地の魅力的な植物、最先端の育種技術などの優れた技術を展示



花きイメージ（2016アンタルヤ・日本出展）



屋外・屋内庭園イメージ（2019北京・日本出展）

2.2 主催者展示（テーマ展示の例）

誓いの樹

1. テーマとの関係性

2050年に向けて地球規模の環境危機を乗り越え、**持続可能な社会を実現するために、行政、企業、NPO、個人がどのような行動を具体的に取るか、それぞれの想いを誓いの木に託す、象徴となる生命の“樹”を育てる。**

2. 来場者体験

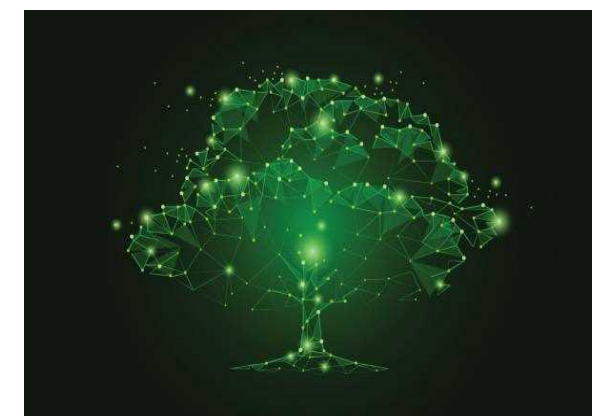
- ・ 「脱炭素」、「エネルギー」、「廃棄物」、「食料」などの複数の種（テーマ）が蒔かれ、それぞれの樹を育てる。
- ・ 来場者は、自分の誓いを書き込んで、樹に水を与える（投函する）。**投函が一定数を超えるごとに誓いの樹はアート作品として拡張される。**
- ・ リアルとバーチャルで構築され、バーチャルでは誓いが集計され可視化。
- ・ **10年後に解体し、木片はがきとして誓いを立てた者に送付する。**

3. 効果

- ・ 地球規模の環境危機に**自ら誓いを立て参加することで意識変容**を促す。
- ・ 将来的に今回のテーマを使った**シンポジウムや国際会議などを開催する場合のエクスカーシオン**の訪問先となる。



リアル・誓いの樹イメージ



バーチャル・誓いの樹イメージ

サブテーマ

自然との調和
Co-adaptation

連携による解決
Co-operation

事業コンセプト

価値を
再定義する
Revise

行動変容に
繋げる
Change

環境負荷低減を
徹底する
Care

繋がりを
広げる
Connect

「種」ミュージアム

1. テーマとの関係性

花、穀物、野菜などの植物の「種」に着目し、**遺伝子資源、遺伝的多様性を知る**。人から人へ**種が継承されてきたつながりの歴史**を学ぶとともに、**地元の農家やNPO等と連携し、新たな園芸・農業の振興につなげる**。

2. 来場者体験

- ・「種」をテーマに、**世界の植物の品種改良の歴史、種の伝搬の歴史**などをICTを活用して展示。
- ・地元農家と連携した**地域の植物の種採取の体験**。
- ・**同じ種を異なる土壌・環境で育成した場合の生育結果の違い**などをビジュアルに展示。

3. 効果

- ・**植物の価値を再定義**するとともに、**多様性を認識**する。
- ・都市における**地域に支えられた農業及び農家とのつながりの重要性**を学ぶ。



世界の「種」の紹介パノラマイメージ



収蔵種子の生長展示イメージ



「種」のコレクションイメージ

サブテーマ

自然との調和
Co-adaptation

緑や農による共存
Co-existence

新産業の創出
Co-creation

事業コンセプト

価値を
再定義する
Revise

多様性に
気付く
Find

行動変容に
繋げる
Change

繋がりを
広げる
Connect

2.2 主催者展示（テーマ展示の例）

未来の風景 遥かなるディナー ～フード・トレーサビリティ～

1. テーマとの関係性

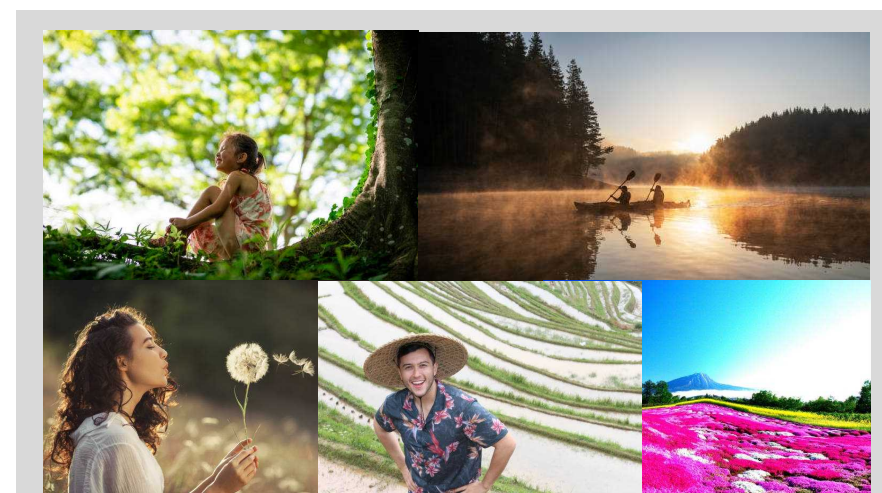
2050年を見据え、環境と調和した人間活動を継続していくために、自然と人間の関係性を見つめ直してこれからどのように行動していくべきか、**幸せな未来の風景を考える体験型レストラン**。

2. 来場者体験

- 生態系サービスの4機能（資源を提供する機能、生命環境を制御する機能、楽しみや安心を提供する機能、これらの機能を支える機能）を表現する風景として、暮らしのなかで自然と触れ合う瞬間（＝未来に残したい自然）を写真で切り取り、オンラインに投稿する
- 集まった写真をベースに創った映像を「未来の風景」として展示施設全体に投影する
- 施設内で展開されるレストランで、地元野菜とともに自然の多様な表情を楽しむ

3. 効果

- 生態系サービスの恩恵に支えられている生活を実感し、未来に残していくためにはどうすべきか、考えるきっかけとなる



投稿される写真 イメージ



ミュージアムレストラン イメージ

サブテーマ

自然との調和
Co-adaptation

緑や農による共存
Co-existence

連携による解決
Co-operation

事業コンセプト

価値を
再定義する
Revise

多様性に
気付く
Find

行動変容に
繋げる
Change

分かち合う
Share

光る生物の大花壇

1. テーマとの関連性

人類が自然の技術を取り込みながら、園芸文化として自然と共生してきた歴史を知り、文化としての生態系サービスの価値を体験する。また、花き分野の新たなビジネス展開の契機を提供する。

2. 来場者体験

- 江戸時代に品種改良されて育てられた朝顔の歴史を知る花壇や、自ら光る発光生物、バイオ技術による発光生物で構成された大花壇を整備。
- アーティストや交響楽団と連携し、光る大花壇を背景としたコンサート・イベント等を開催することで、夜の静寂の中で、神秘的な屋外フェスを行う。
- 通常の世界では見られない植物をみることができる他、コンサート・イベント等を、普段味わえない非日常的な神秘的な空間で、鑑賞することができる。

3. 効果

- 自然とふれあうことの喜びや楽しさ、人と人のつながりの大切さを再認識する。
- 光る生物は、観察する時間帯により様相が異なるため、会期中に訪問する時間帯や時期を変えて、何度も訪問する来場者が期待できる。



自ら光る発光生物のイメージ



品種改良朝顔の展示イメージ

サブテーマ

緑や農による共存
Co-existence

新産業の創出
Co-creation

事業コンセプト

多様性に
気付く
Find

行動変容に
繋げる
Change

分かち合う
Share

繋がりを拡
げる
Connect

2.3 コンペティション

- ・ AIPH規則に示された屋外庭園・屋内庭園および製品コンペティションを実施するほか、独自企画のコンペティションを実施
- ・ 製品コンペティションでは、花き・園芸のブランド化や日本・横浜の特色を発信するようなカテゴリを検討

コンペティションの種類		
AIPH規則	屋外庭園・屋内庭園 コンペティション	国、国際機関、自治体、企業、市民団体等による、常設庭園のコンペティション
	製品コンペティション	花き等観賞用植物および果物と野菜のコンペティション A) 春 B) 夏 C) 秋
独自企画コンペティション		花き・園芸産業のみならず、本博覧会のテーマ、サブテーマに沿った多様なコンペティション

製品コンペティション

AIPH規則に示されたカテゴリ例

春	夏	秋
球根および塊茎植物	夏の花	テラスと鉢植え
植え込み	ゆり	バラ
蘭	レンリソウ属	鉢植え植物
春の花	野菜	観葉植物
鉢植え植物	カーネーション	植え込み
観葉植物	球根および塊茎植物	菊
フルーツ	フラワーアレンジメント	ガーベラ
野菜	フルーツ	秋の花
フラワーアレンジメント	植え込み	フラワーアレンジメント
テラスと鉢植え	鉢植え植物	球根および塊茎植物
	観葉植物	フルーツ
		野菜
		盆栽

カテゴリの検討要素

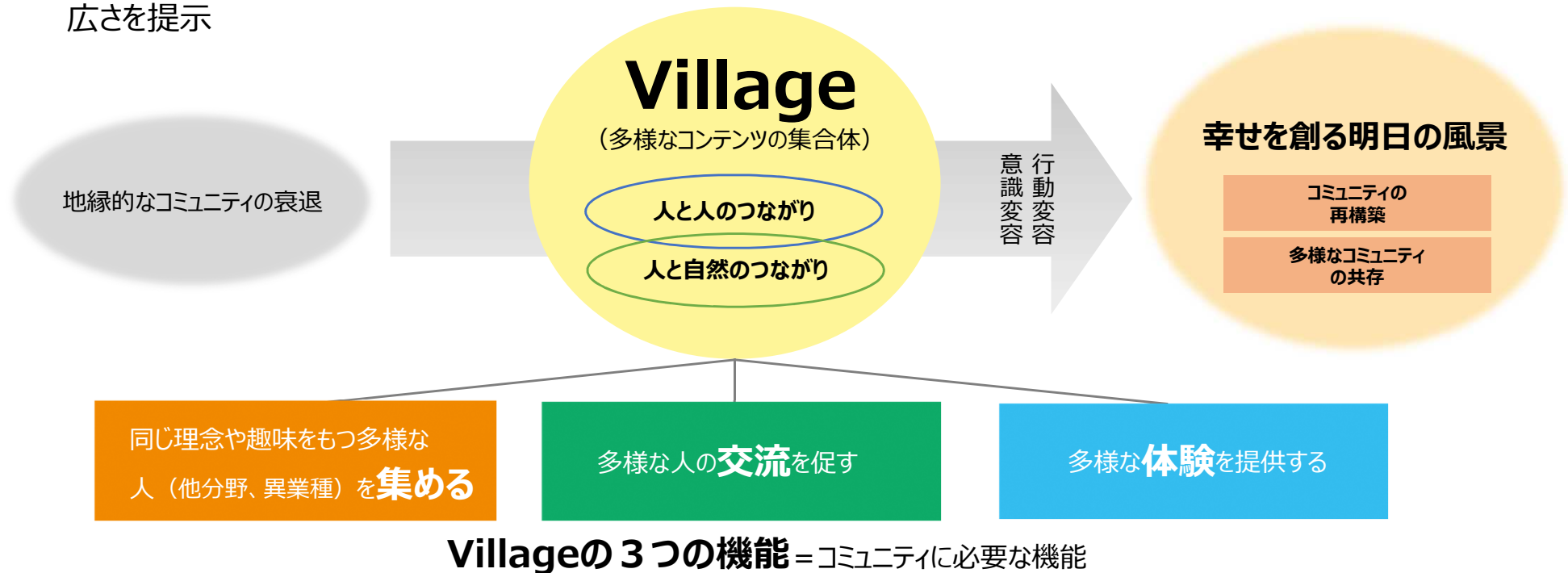
- ・ 花き園芸のブランド化
- ・ 研究成果や新技術の発信
- ・ ビジネス発展
- ・ 日本・横浜の特色（文化や、歴史性）
- ・ 日本・海外の花き園芸のトレンド

本博覧会での実施案

- ・ カーネーション
（日本の高い技術を発信しブランド化）
- ・ 盆栽（日本文化の発信）
- ・ バラ（日本はバラの自生地）
- ・ ユリ
（開港時、横浜からのユリ根の輸出の歴史）
- ・ ラン
（開港時、横浜へのランの輸入の歴史）
- ・ フルーツ
（日本の高付加価値化な果物のPR）
- ・ 夏の花 朝顔（江戸の古典園芸植物）
- ・ 菊（江戸の古典園芸植物）
- ・ フラワーアレンジメント（和のテイスト）

◆「参加・交流・体験」を促進するコミュニティ創出の場

- 人は、**周りの環境（人、動物、自然など取り巻く環境全般）**との「つながり」から**幸せを感じる**が、近年の均質化された都市や多様化する価値観のもとでは、かつて里山の集落などで見られた地縁的なつながりによるコミュニティは衰退
- 一方で、情報技術の進展やストレスを受けて、本能的に自然を求めてリアルな体験に惹かれていく傾向が強まっている現在においては、地縁的なつながりに代わり、共通の理念や趣味などをきっかけにした**多様なつながりによるコミュニティが増加**
- 本博覧会では、多様なコンテンツ（庭園、展示、飲食など）を複合させ、**人や自然とのつながりを体現するコンテンツの集合体＝「Village」**を形成。Villageには、従来型コミュニティの中核施設（公民館等）が担っていた3つの機能「人を集める」「交流を促す」「体験を提供する」を持たせる。
- 会場内にメッセージ性の異なる複数のVillageを配置して、多様で新たな「つながり」を体現することで、「幸せ」の幅広さを提示



3.2 Villageにおけるテーマ・サブテーマの展開

◆ Villageとサブテーマ及びコミュニティの関係

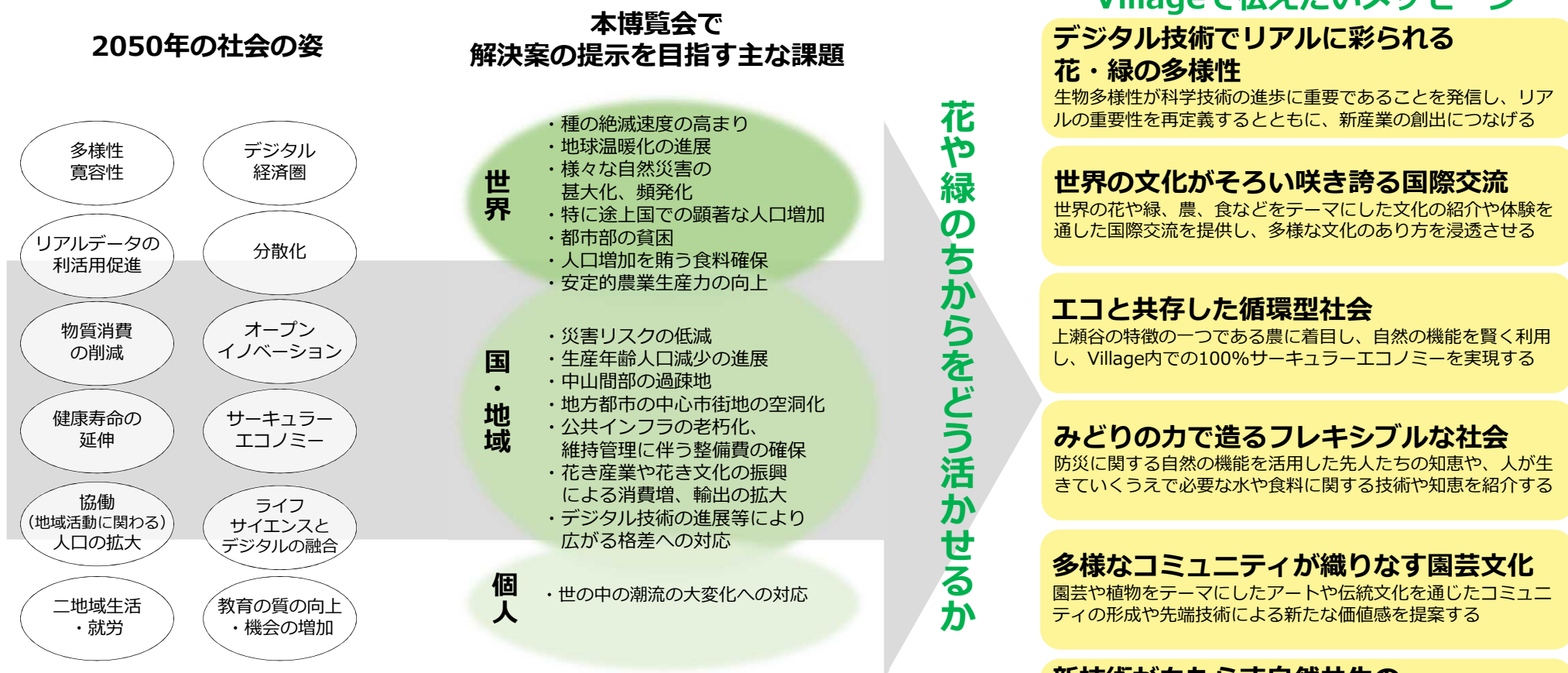
- 各コンテンツは、単体もしくは複数のサブテーマを体現。ひとつのVillage内に複数のコンテンツを組み合わせ配置することにより、**単独のVillageでもすべてのサブテーマを体現**できるようにする
- 各コンテンツは、サブテーマの体現すると同時に、Villageの3つの機能のいずれかを重点的に担うことを明確にする。ひとつひとつの**Village内に、コミュニティに必要な機能が過不足なく含まれる**ようにする
- コミュニティの構築には、まずは人を集めることが重要。**話題性のあるコンテンツにより人を集め、そのコンテンツを通じてVillageに集まった人々がVillage内で交流し、さらに様々な体験により「つながり」を記憶に残せるようにする**
- 博覧会参加後に、暮らしのなかで新しいつながりをつくり、**コミュニティの構築に関わっていくことができる仕組み**をVillageで展開



3.3 Villageで伝えたいメッセージ

◆ 6つのメッセージで多様な人を集める

- ・ 参加者がワクワクし、Villageに来たくなるようなメッセージを各Villageに掲げる
- ・ 2050年の社会を見据えながら、本博覧会で解決案を提示を目指す課題を踏まえて「2050年の社会に花や緑の力をどう活かせるか」という視点6つのメッセージを導いた
- ・ 異なるメッセージを発信するVillageを配置し、多様なコミュニティのあり方を体現する



3.4 Villageイメージ図



3.4 Villageにおけるコンテンツの展開

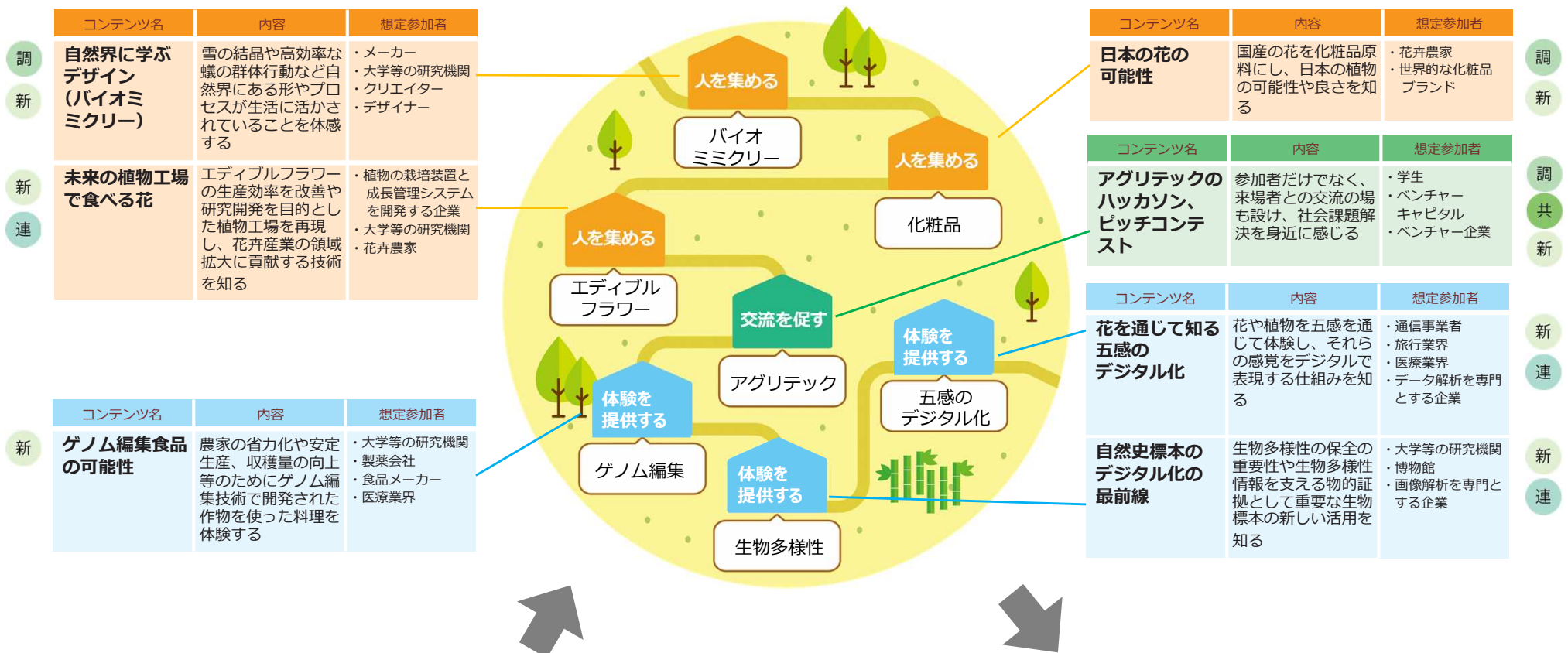
デジタル技術でリアルに彩られる花・緑の多様性

生物多様性が科学技術の進歩に重要であることを発信し、リアルの重要性を再定義するとともに、新産業の創出につなげる

<Village配置の考え方>

斬新な建物中心で、未来的な印象を与えるコンテンツを多く展開し、ワクワク感を演出できるので、最初に来場者の目に付きやすい入場ゲート付近に配置する

汎用： 調 自然との調和 共 緑や農による共存 新 新産業の創出 連 連携による解決



会期前の取り組み

- ・ 国内外の子どもたちに「未来の植物工場」のアイデアを出してもらおう。
- ・ 生物多様性スタンプラリーを企画し、各地の博物館や動物園をめぐり、生物多様性の重要性を知ってもらおう。

レガシー

- ・ アグリテックのハッカソンやピッチコンテストを年次イベント化し、上瀬谷で開催。国内外から関心の高い人を集め、地域の賑わいや地元農業関係の活気を生み出す。

3.4 Villageにおけるコンテンツの展開

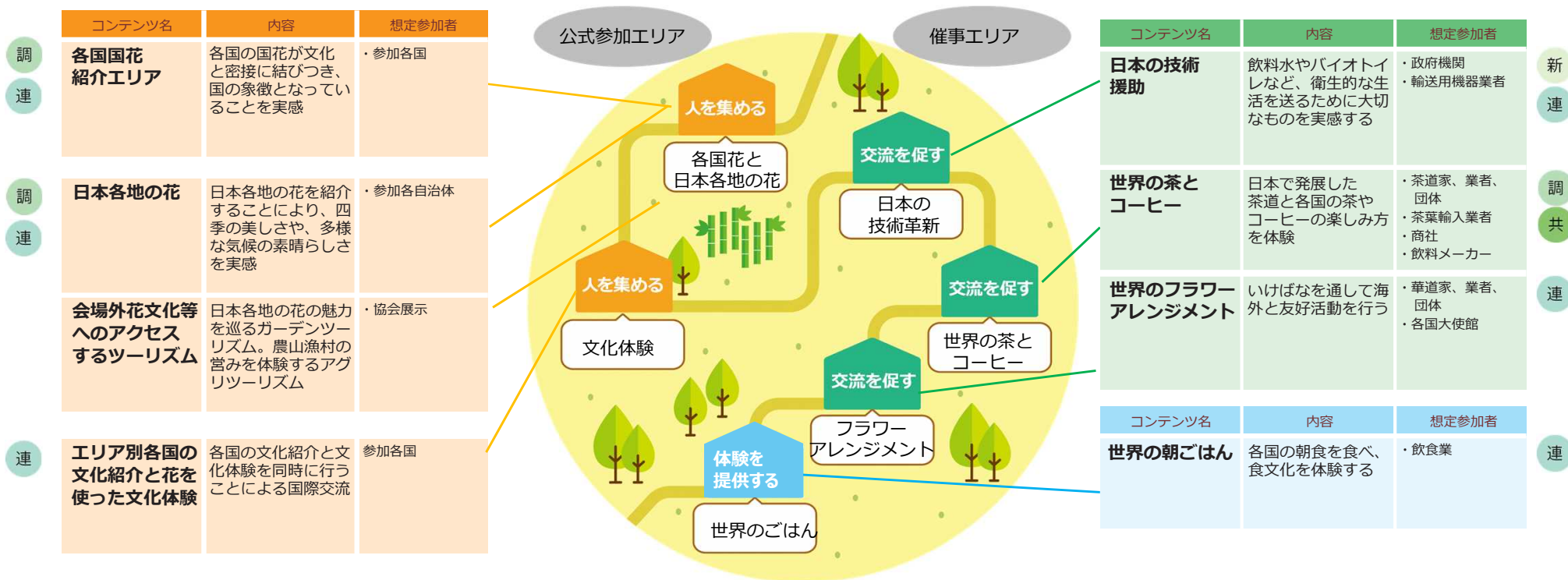
世界の文化がそろう咲き誇る国際交流

世界の花や緑、農、食などをテーマにした文化の紹介や体験を通じた国際交流を提供し、多様な文化のあり方を浸透させる

<Village配置の考え方>

国や地域ごとに違う文化を体験を通じて実感できる展開を行うため、催事施設や公式参加エリアと連携した交流イベントを開催できるような配置にする

汎用：調 自然との調和 共 緑や農による共存 新 新産業の創出 連 連携による解決



会期前の取り組み

- 市内の学生や留学生を中心として、コンテンツ企画を行い、日本と海外の各国が園芸・農を通じて個人レベルでのネットワークを構築する。

レガシー

- 各国のナショナルデーなどを契機に、多数の国からの参加者を迎え入れ、園芸・農・食を通じた文化コミュニティを構築する。

3.4 Villageにおけるコンテンツの展開

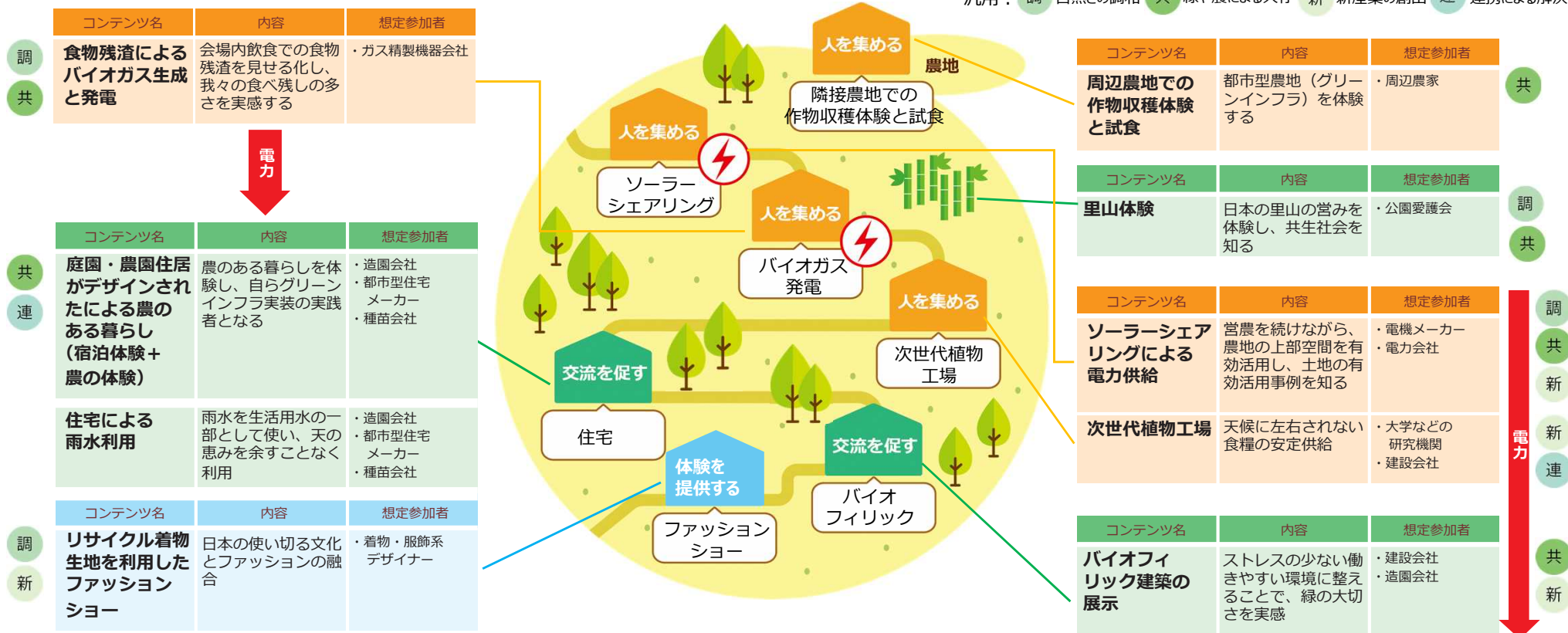
エコと共存した循環型社会

上瀬谷の特徴の一つである農に着目し、自然の機能を賢く利用し、Village内での100%サーキュラーエコノミーを実現する

<Village配置の考え方>

建物は少なく、牧歌的な雰囲気演出し、農に着目したコンテンツが多数展開されるため、農地に隣接するエリアに配置し、隣接する農地と連携も視野に入れる

汎用： 調 自然との調和 共 緑や農による共存 新 新産業の創出 連 連携による解決



会期前の取り組み

- ・ 会期3年前より種苗会社と連携し、プレイベントとして個人宅でのプランターによる野菜作り教室を開催する。

レガシー

- ・ 個人宅(戸建・集合住宅問わず)にて、野菜作りが継続して行われ、食の大切さや農への理解が深まる。

3.4 Villageにおけるコンテンツの展開

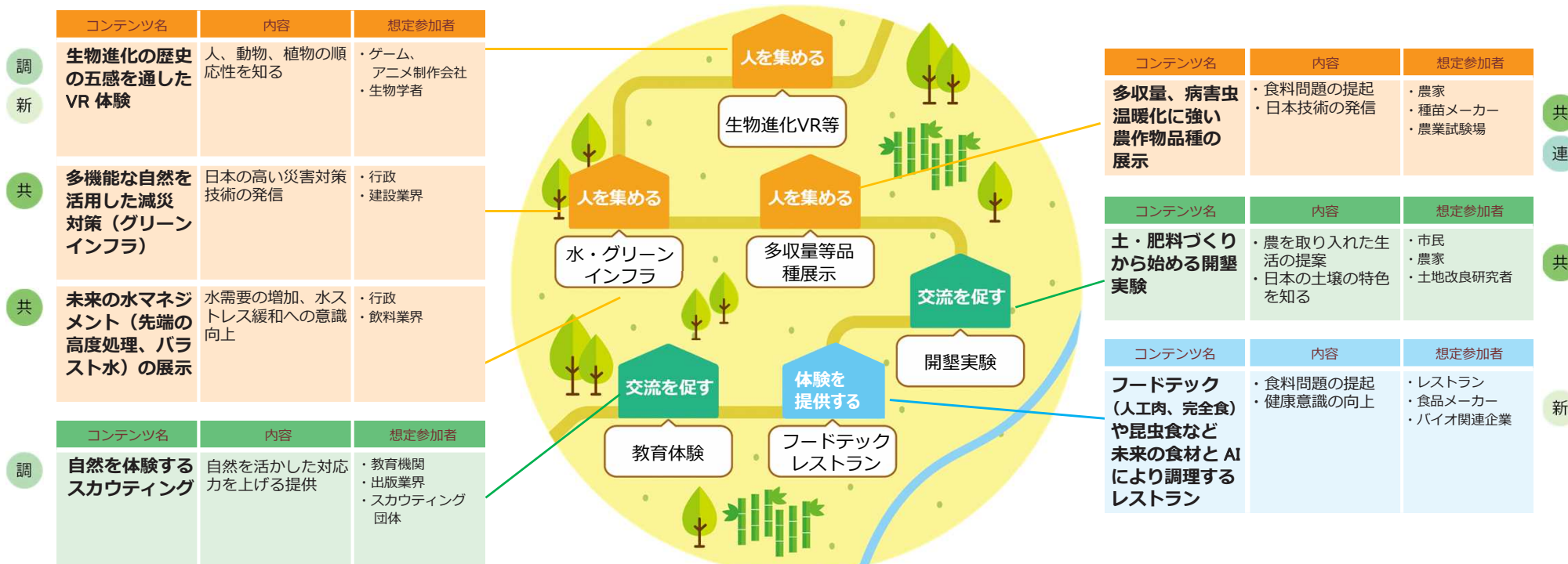
みどりの力で造るフレキシブルな社会

防災に関する自然の機能を活用した先人たちの知恵や、人が生きていくうえで必要な水や食料に関する技術や知恵を紹介する

<Village配置の考え方>

生命の源である水や食に着目するとともに、自然の持つ多様な機能を活用した先人たちの知恵をコンテンツを展開し、水源に隣接させ効果的な演出とする

汎用：調 自然との調和 共 緑や農による共存 新 新産業の創出 連 連携による解決



会期前の取り組み

- 植物等、自然資源を活かした防災技術や日本の高い農業技術に関する、ワークショップを途上国を含む世界の留学生・研修生や横浜市民、プロ農家、地元農家、NPOなどで実施。

レガシー

- 農業大国である途上国と横浜市における農業ネットワークの構築
- 自然と共生するための技術の開発、普及を進める横浜市のグリーンシティとしてのブランド向上

3.4 Villageにおけるコンテンツの展開

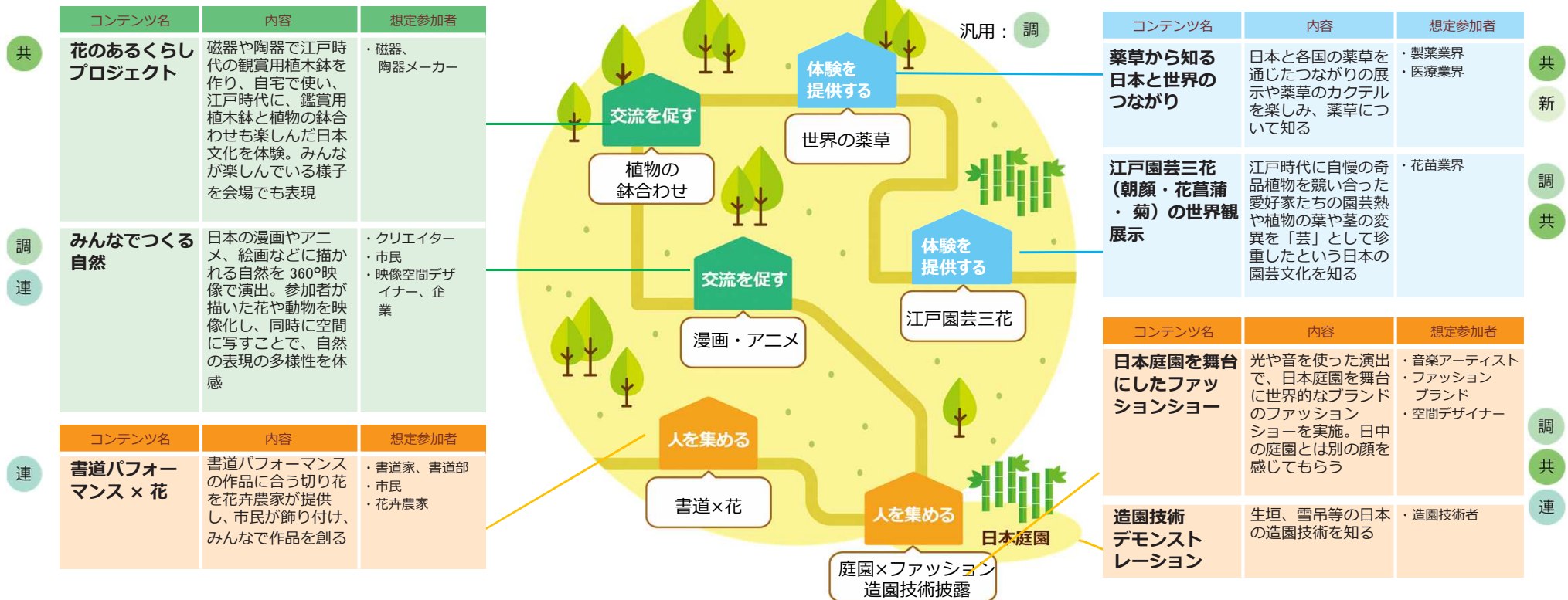
多様なコミュニティが織りなす園芸文化

園芸や植物をテーマにしたアートや伝統文化を通じたコミュニティの形成や先端技術による新たな価値感を提案する

<Village配置の考え方>

先端技術により日本文化の新しい見え方や日本と各国とのつながりを知ることで、新たな発見につなげる。日本庭園との連携により効果的な演出を図る

自然との調和 共 緑や農による共存 新 新産業の創出 連 連携による解決



会期前の取り組み

- 世界に知られる日本のアニメで、上瀬谷をテーマにしたアニメ製作を行い、本博覧会で伝えたいメッセージを世界に発信していく。監督のもと、国内外の参加型（キャラクター名の募集など）でアニメをつくる。

レガシー

- スポンサー、サポーターの協力のもと、本博覧会のテーマに沿ったアニメを継続して製作し、横浜ブランドとして世界に発信する。

3.4 Villageにおけるコンテンツの展開

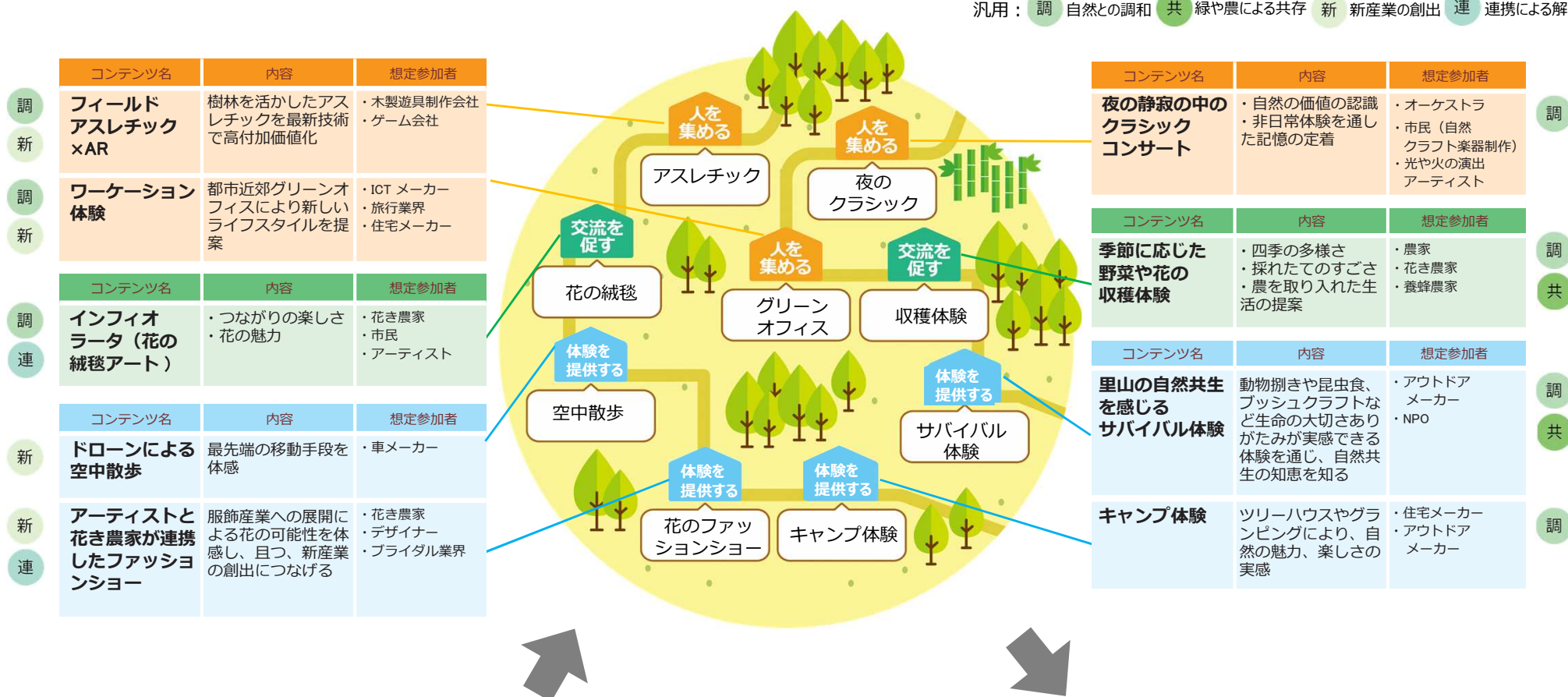
新技術がもたらす自然共生のライフスタイルへの転換

技術の進展で可能になる自然とふれあう時間が充実したライフスタイルを提案する

<Village配置の考え方>

広さを活かした自然との触れ合いや余暇時間の楽しみを通じた賑わいの演出を期待できるため、来場者の目に付きやすい入場ゲート付近に配置する

汎用：調 自然との調和 共 緑や農による共存 新 新産業の創出 連 連携による解決



会期前の取り組み

- ・ 博覧会開催に合わせた花き農家、アーティスト、市民と連携してインフィオラータを演出する。
- ・ 間伐材や再生材と3Dプリンタを活用したグランピング施設を建設業界、アーティスト、市民と連携で建設。

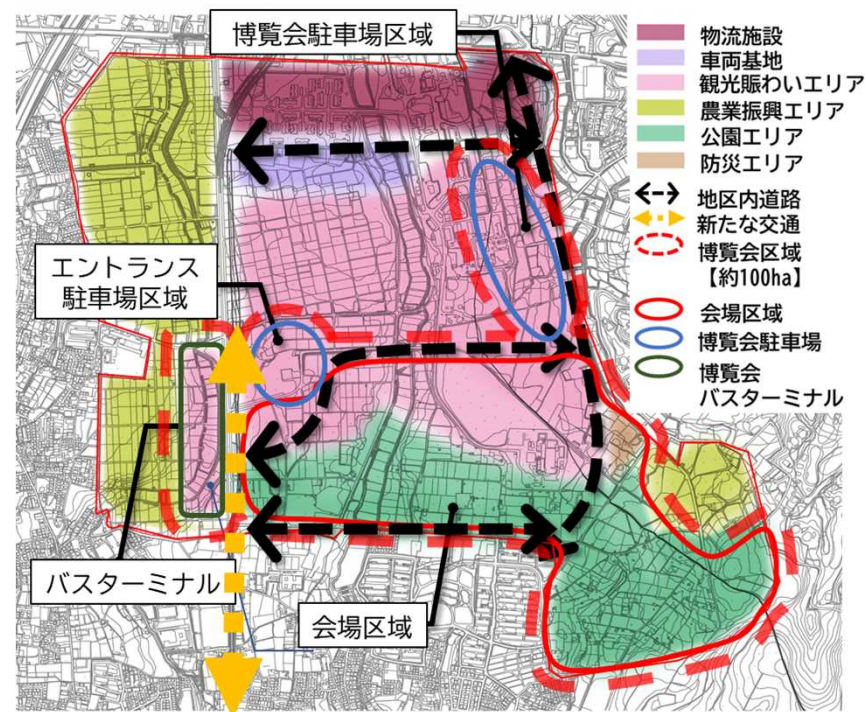
レガシー

- ・ ワーケーションや半農半Xなど、新しいライフスタイルを定着させる。

<第2回具体化検討会の内容>

●自然特性を活かした博覧会区域【100ha】

【会場計画で活かす環境ポテンシャル】



●会場コンセプトの検討

自然と人とが共生してきた里山に蓄積された知恵や人が関わる仕組みについて、本博覧会のコンセプトとして取り入れ、自然と人との関わりが減少しつつある都市の暮らしを変革する、身近な自然とともに暮らす農的生活を幸せに満ちた**未来社会の風景**として提案し、**社会課題解決のための多様な主体による連携を可能とする博覧会会場**とする。

●会場計画の構成

テーマ・サブテーマ

テーマ・サブテーマを具現化するため、自然と人が共生してきた里山の思想を会場計画に取り込む

会場計画

自然と人との関わりが減少し均質化する都市の暮らしを変革し、
身近な自然とともに暮らす農的生活を幸せに満ちた未来社会の風景として提案

会場コンセプト

「里山で培われた思想・行動が未来を広げ、花と緑が輝き、人と自然が共に紡ぐ明日の風景」

会場構成

施設計画

グリーン
インフラ計画

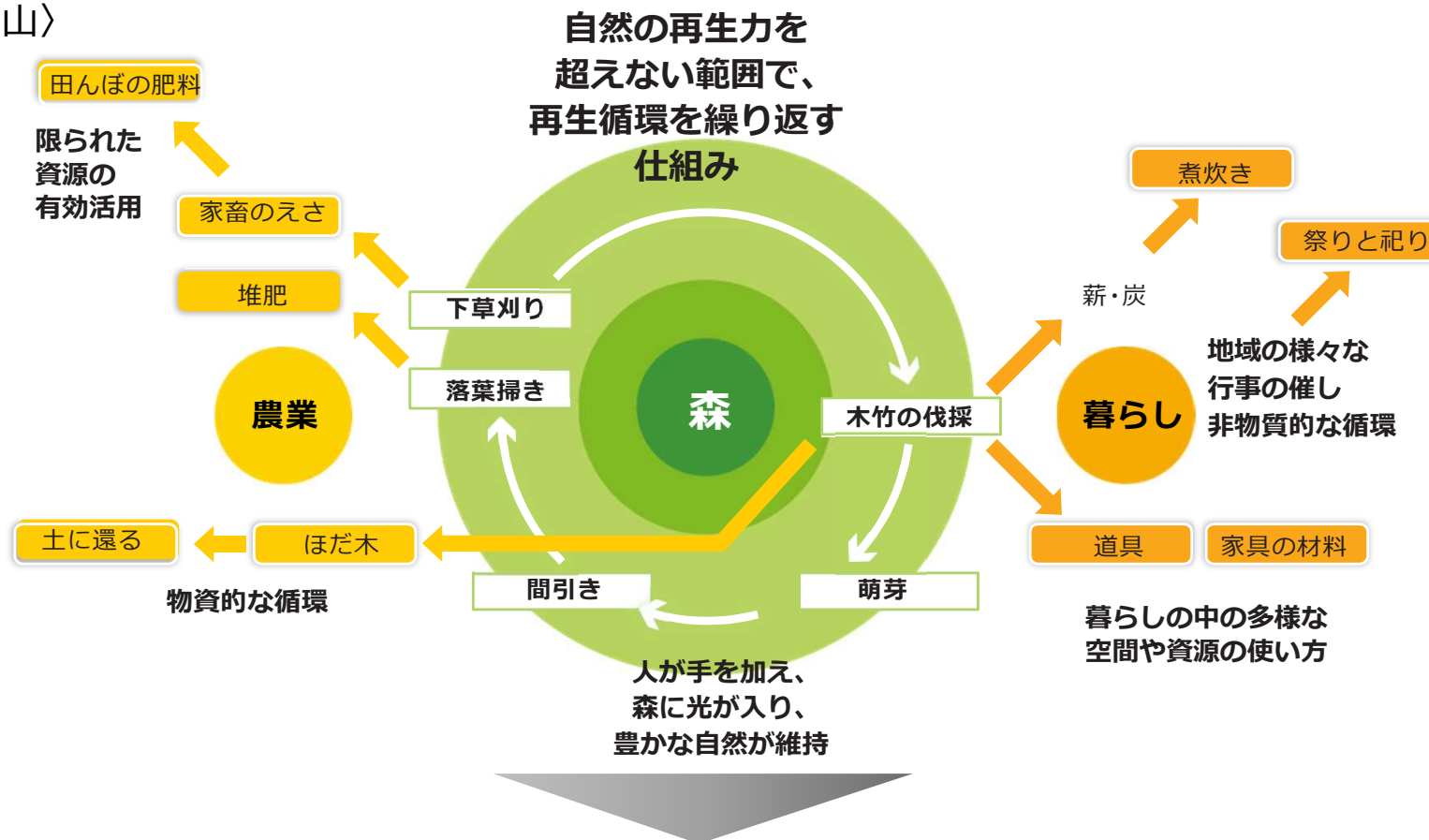
景観計画

動線計画

4.1 未来社会の風景の検討

(1) 里山に培われた思想から導かれる3つの要素

〈従来の里山〉



自然からの恵みを享受し、自然の力をいかす、農や里の営みと暮らし方

➡ (自然システム) 「農や緑による自然の恵みを享受する暮らし」

土地特性に沿った自然環境を理解し人が自然と共生する資源再循環のシステム

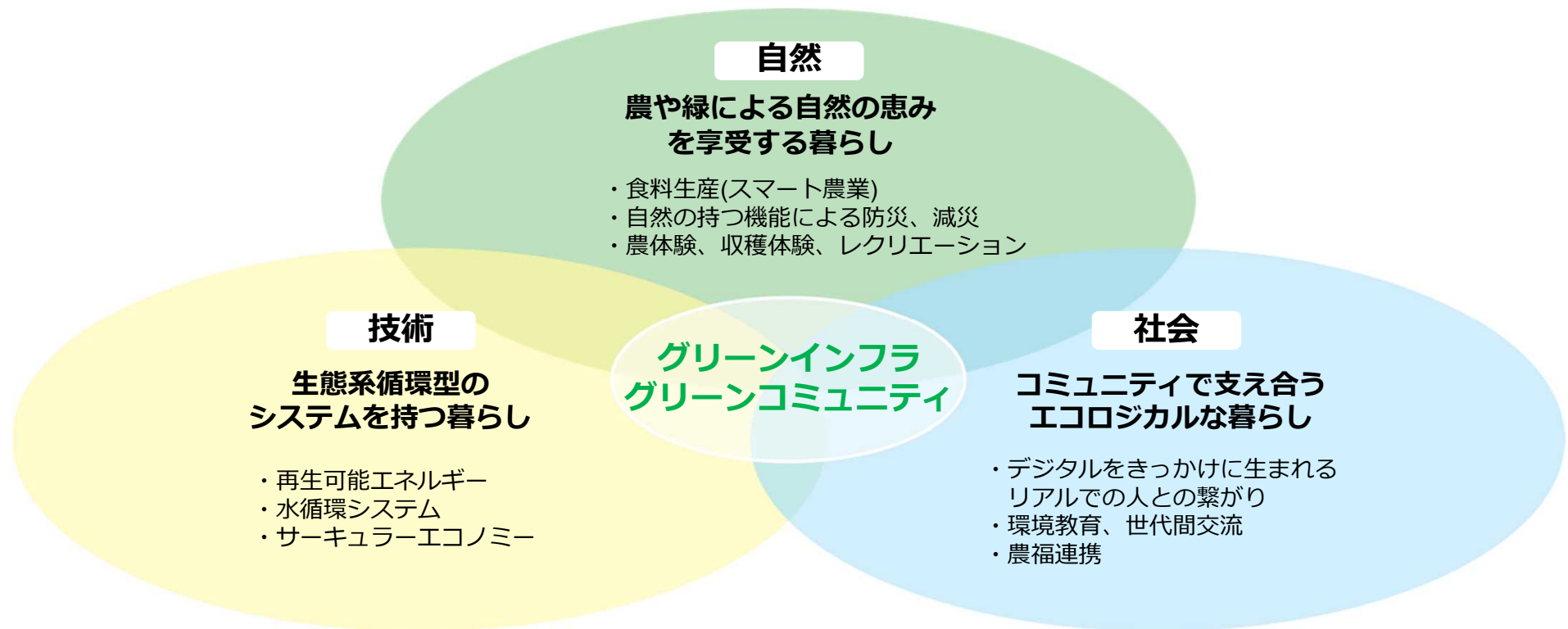
➡ (技術システム) 「生態系循環型のシステムを持つ暮らし」

農や林業を通じた地域経済とそれを支える共同管理（コミュニティ）の仕組み

➡ (社会システム) 「コミュニティで支え合うエコロジカルな暮らし」

(2) 横浜・上瀬谷ならではの未来社会の風景

- 本博覧会では、「里山で培われた要素」と「デジタル化の進展等に伴う自然と人の関係性のあり方」に着目し、横浜・上瀬谷ならではの未来社会の風景として、「ICTなどの先端技術に支えられた豊かな花・緑や身近な自然との関わり方、身近な自然と共に暮らす農的な社会」を提示する。



- 自然と人の関わる仕組みは、自然と人がともに作り上げ育てるものであり、**未来の社会システムとしてグリーンインフラを実装し、そのインフラを守り育てるグリーンコミュニティの持続的な活動につなげる**ため、園芸博における様々な体験などを通じて、意識と行動の変容を誘発していく。

(3) 横浜・上瀬谷における博覧会会場の位置付け

- 横浜市は、緑を重視して都市づくりを進めてきた歴史を持ち、特に、大都市でありながら発展した都市農業やまとまりのある緑が身近にある郊外部を形成していることが特徴。
- こうした横浜市の都市的特徴を踏まえ、博覧会場では、都市的な土地利用と都市農地や二次林をつなぐモザイク的な空間変化を意識。



大都市でありながら
農が身近にある暮らし



緑をベースとした居住空間
(グリーンマトリックス
計画論による港北NT)



クリエイティブな未来都市
(MM21)



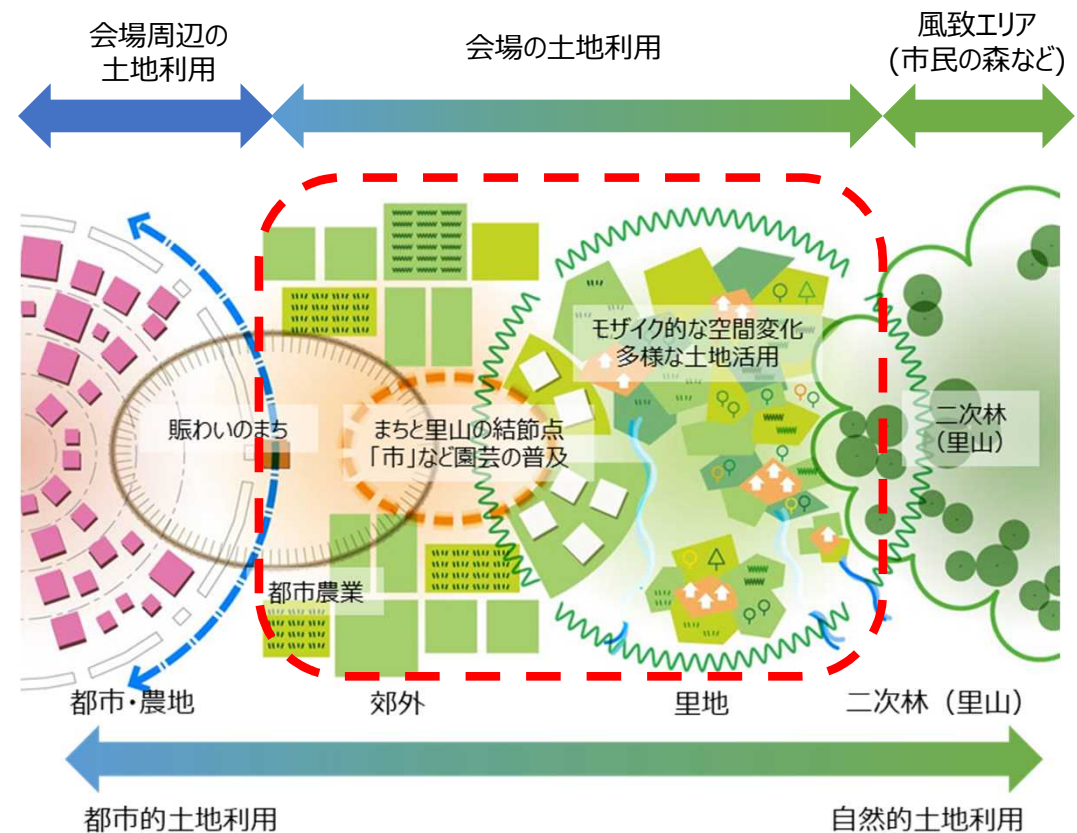
開港からの歴史を活かし
受け継ぐ(山手エリア)



日本庭園の
空間構造に
よるおもて
なしの空間
(三溪園)



【横浜市の都市的特性】



【博覧会場（赤点線）と周辺との関係図】

4.2 会場構成

(1) 国際園芸博覧会を彩る庭園等

- 花や緑を主役とする国際園芸博覧会では、屋外における庭園や花壇が会場を構成する重要な要素であり、公式参加者(海外参加国、国際機関)をはじめ、花き園芸産業、農業、造園業をはじめ様々な参加者による出展庭園等を想定している。

庭園・花壇の種類		内容	出展者	想定規模
参加者 公式 庭園	国際出展庭園	海外参加国や国際機関による出展庭園。国際性の追求、各国の伝統的な造園・園芸技術の紹介や異文化体験・交流等の観点からも博覧会において重要な要素を持つ。コンペティション会場としても使われる。	参加国	計5.0ha
	AIPH庭園	AIPHがその活動を促進するための庭園。(AIPH規則第11条に規定)	AIPH	
政府庭園		政府による出展庭園。博覧会のメインテーマを広く理解してもらう先導的な役割と政府出展としての2つの役割を持つ。	政府	0.9ha
主催者庭園 (シンボルガーデン)		主催者による博覧会のシンボルとなるガーデン。相沢川の谷戸地形をいかし、美しい花を見せるだけでなく、グリーンインフラとしての貯水機能を備えるとともに、最先端技術などの活用による国際園芸博覧会にふさわしい庭園とする。	主催者	2.6ha
参加者 非公式 庭園	開催都市出展庭園	開催都市による出展庭園。博覧会後に、公園となる和泉川周辺において、湿潤な環境や流路など自然ポテンシャルを活かした庭園とする。	横浜市	1.5ha
	国内出展庭園	Village内において、国内の民間企業、園芸家、地方公共団体など国内の多様な出展者による庭園。コンペティション会場としても使われる。	参加者	1.1ha
日本庭園		迎賓館に隣接する庭園であり、海外VIPのおもてなしや日本の文化や園芸技術の発進を担う庭園とする。	未定	1.0ha
修景花壇		主園路・副園路等の動線沿いに展開する花壇。各園路ごとにテーマ性を持たせるなど、来場者が会場内の移動を楽しむことができるよう演出する。また、市民参加による花壇の植え付けや管理も想定する。	主催者	3.4ha
			合計	15.5ha

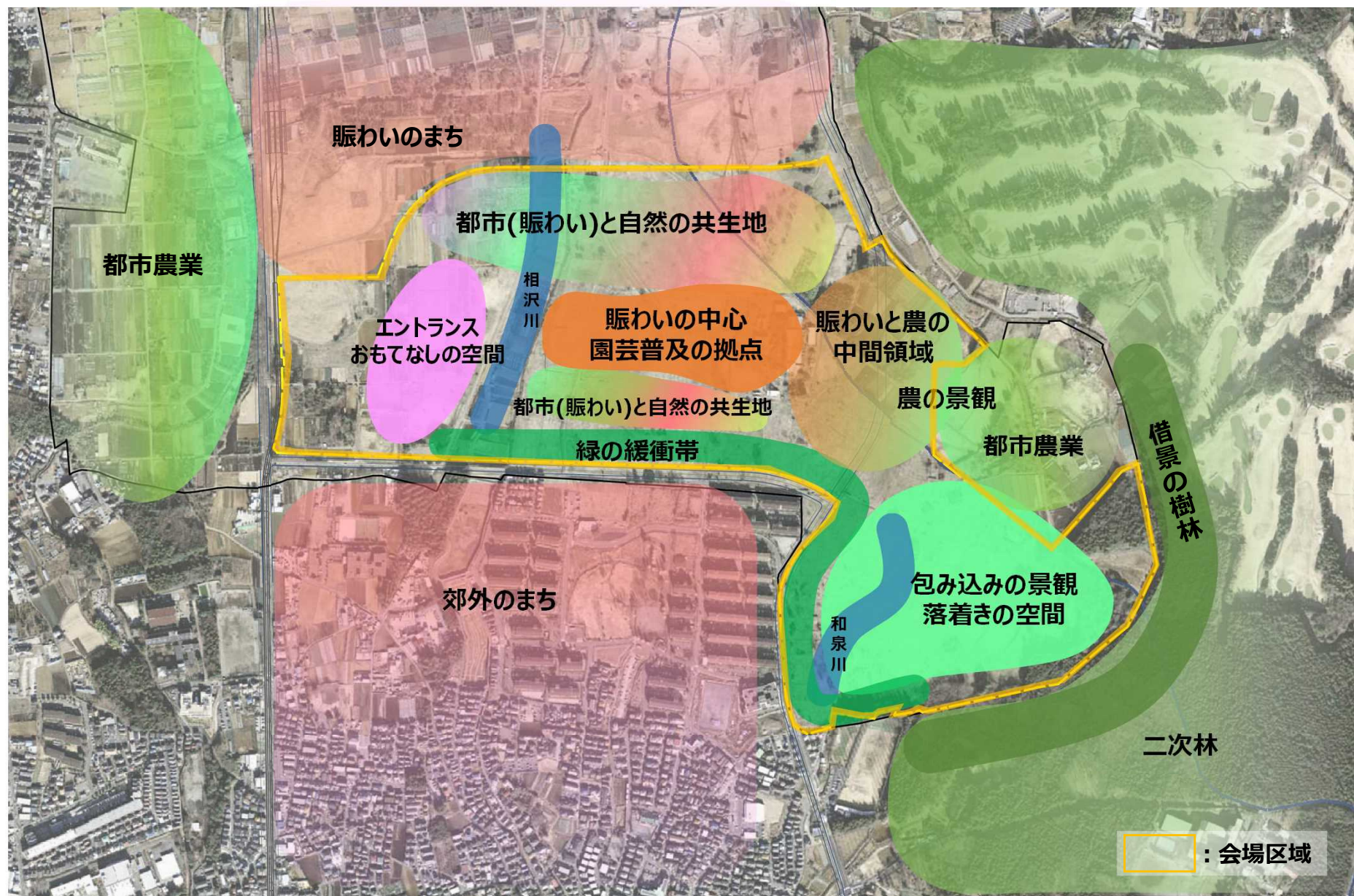
(2) 展示等の施設

- AIPH規則、過去の国際園芸博覧会における実績、運営上の必要性を鑑み、施設の数や規模を設定する。
- また、Villageの考え方と整合を図りつつ、環境負荷低減や建設費縮減の観点から、多機能複合化、コンパクト化、公共施設の活用、3 R(Reduce、Reuse、Recycle)を積極的に図る。

区分	施設名称	内容	想定規模
展示施設	Village展示施設	Villageに出展する自治体、民間、団体等がテーマに沿った展示を行う施設。コンペティションでの利用も想定。	11,500m ²
	メイン展示施設	博覧会のメインテーマ・サブテーマを具現化し、広く理解してもらう先導的な役割を持つ施設。	10,000m ²
	屋内展示施設（国際出展）	海外参加国や国際機関の出展が中心となる屋内展示施設。	5,000m ²
	屋内展示施設（主催者、国内出展）	主催者のほか、国内の自治体、民間企業、団体等が展示を行う施設、コンペティションでの利用も想定。	5,000m ²
催事施設	大催事施設	公式行事、公式催事、協会企画催事、博覧会参加催事での利用を想定。3,000人規模の収容を想定。	8,000m ²
	小催事施設	公式行事、公式催事、協会企画催事、博覧会参加催事での利用を想定。400～500人の収容を想定。	1,500m ²
	屋外催事広場 （文化芸術、国際交流等イベント会場）	公式催事、協会企画催事、博覧会参加催事での利用を想定。	16,000m ² （広場の面積）
サービス施設	診療所、案内所、各種サポート 等		7,000m ²
運営施設	運営本部、倉庫 等		16,000m ²
物販飲食施設	飲食施設、物販施設		11,000m ²
合計			91,000m ²

(3) 会場構成の考え方

- 横浜・上瀬谷の特性や会場のあり方などを踏まえ、博覧会としての事業展開を実現させるため、会場構成を整理。



4.2 会場構成

(4) 会場配置 (イメージ案)



(5) Village配置の考え方

Village1

デジタル技術でリアルに彩られる
花・緑の多様性

＜配置の考え方＞

比較的平坦で、入口付近にある。来場者が最初に目に入るVillageであり、未来的な印象を与える先端技術に関するコンテンツによりワクワク感を演出。

Village3

エコと共存した循環型社会

＜配置の考え方＞

農地に隣接するエリアで、隣接する農地と連携も視野に入れ、農に着目したVillageを展開する。

Village5

みどりの力で造るフレキシブルな社会

＜配置の考え方＞

和泉川の源流に隣接することから、生命の源である水や食に着目するとともに、自然の持つ多様な機能を活用した先人たちの知恵をコンテンツを展開する。

Village2

新技術がもたらす自然共生の
ライフスタイルへの転換

＜配置の考え方＞

広大な平地で、将来土地利用では、観光賑わいエリアとなる。広大な広さを活かした自然との触れ合う賑わいの創出を演出する。子供が楽しめるエリア。

Village4

世界の文化がそろう咲き誇る国際交流

＜配置の考え方＞

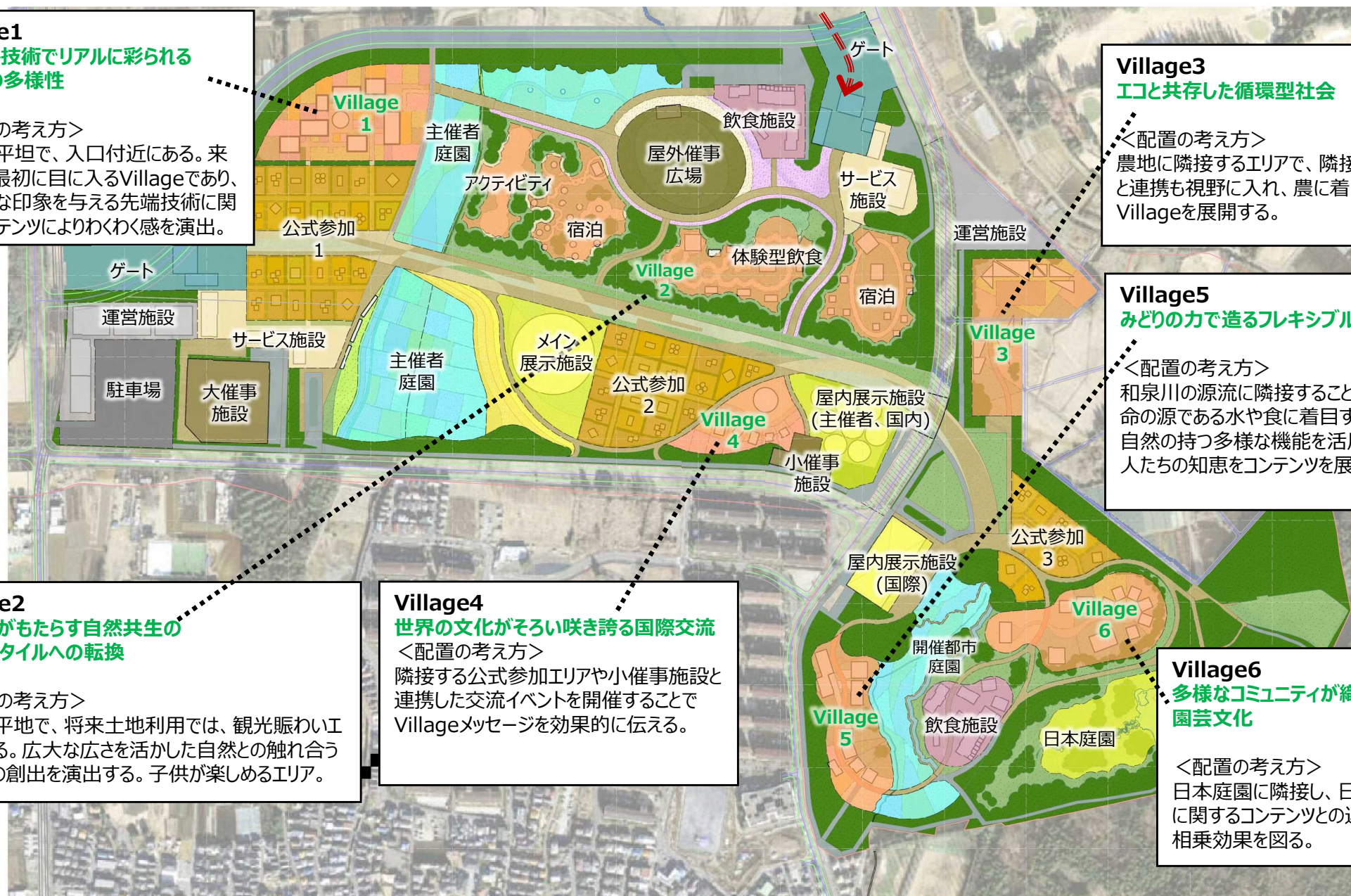
隣接する公式参加エリアや小催事施設と連携した交流イベントを開催することでVillageメッセージを効果的に伝える。

Village6

多様なコミュニティが織りなす
園芸文化

＜配置の考え方＞

日本庭園に隣接し、日本文化に関するコンテンツとの連携により相乗効果を図る。



(1) 会場全体のランドスケープの考え方

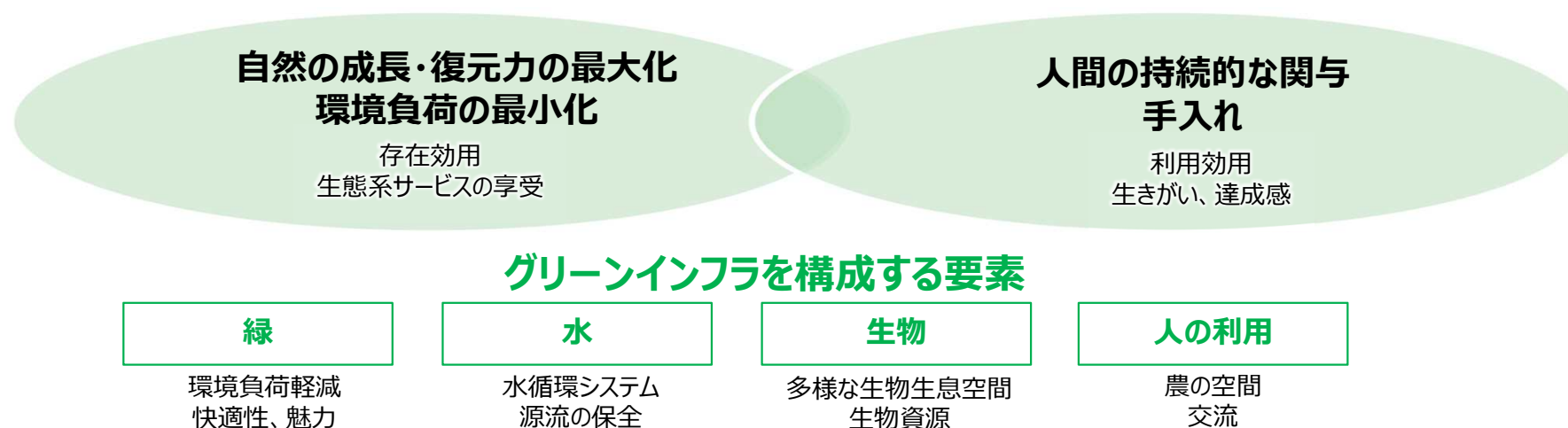
- 会場構成の考え方等に基に、エントランスエリア・おもてなしの空間から二次林(里山的空間)につながる通景軸を設定し、眺望の視点場を中心として双方向の景観を形成するとともに、シーンの変化を演出する。
- また、会場南東部に位置する風致地区の樹林を借景とした囲み込みの景観を生かしたランドスケープとする。



(1) 本博覧会におけるグリーンインフラの考え方

- 本博覧会におけるグリーンインフラの導入にあたっては、様々な公益的機能をもたらす空間として **存在効用（ハード）と利用効用（ソフト）の両面のあり方**を提示していく

【自然と人間の視点から見るグリーンインフラの考え方】



(横浜・上瀬谷ならではの未来社会の風景)

「生態系循環型のシステムを持つ暮らし」の実現

「農や緑による自然の恵みを享受する暮らし」の実現

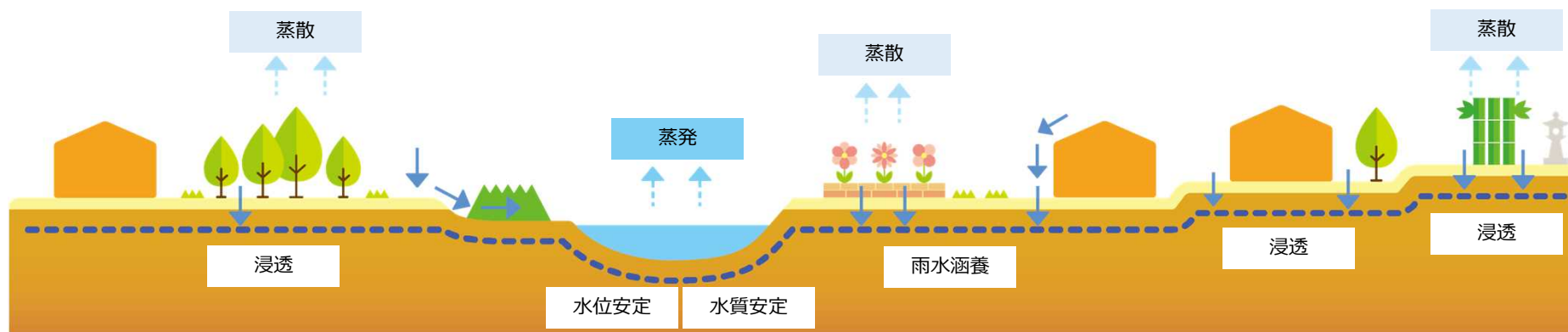
「コミュニティで支え合うエコロジカルな暮らし」の実現

グリーンインフラに期待される主な機能例



(2) 和泉川源流エリアのグリーンインフラ実装イメージ

- ・レガシーとして公園などに受け継がれるグリーンインフラと、会場期間のみ実験的活用を試みるグリーンインフラの両面で、積極的な導入を図る。



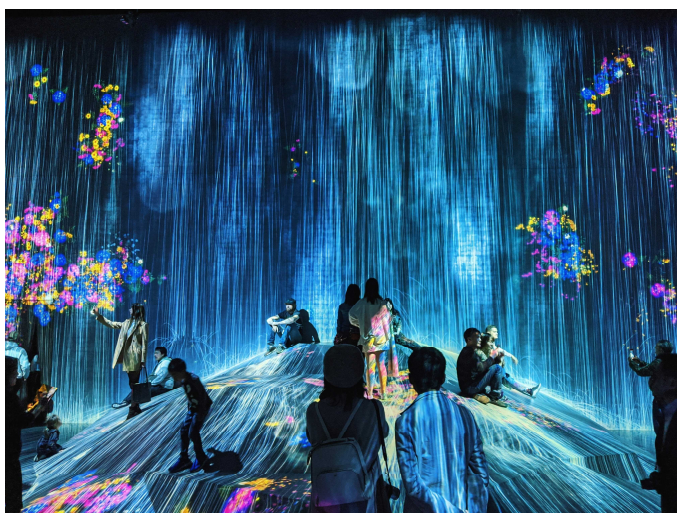
会場内	樹林	湿地	遊水池	花壇	菜園	Village	日本庭園
水管理	雨水浸透貯留 水質浄化			雨庭 雨水の灌水利用	雨水の灌水利用	雨庭、透水性舗装、浸透樹 雨樋非接続、汚水処理	雨庭、浸透樹 雨樋非接続、水循環
物質循環	樹木の管理 間伐材・伐採材利用	水循環		植物残渣の有機肥料化、再利用		生ごみの有機肥料化、木材利用 廃材・エコ資材活用、水循環	木材利用 廃材・エコ資材活用、水循環
脱炭素と エネルギー	バイオマス CO2吸収、酸素供給		小水力発電	風車動力	太陽光・太陽熱発電 (ソーラーシェアリング)	太陽光・太陽熱発電、風力発電 バイオマス発電、特殊空間緑化	太陽光・太陽熱発電
防災・減災	水源涵養、表土崩壊抑制 防風林、防火帯	治水		土壌浸食制御		雨水流出抑制	
環境負荷軽減	湧水・湿地環境の回復 野生生物の生育・生息環境 エコトーン(移行帯)			涼風のにじみだし 微気象緩和 エコトーン(移行帯)		暑熱環境緩和 輻射熱の抑制 微気象緩和 特殊空間緑化	
生物共生						暑熱環境緩和 輻射熱の抑制 微気象緩和	
レジリエンス	間伐材・伐採材活用	自立分散型エネルギー構築、水源供給		地力のある土壌における回復性・弾性、食料生産		自立分散型エネルギー構築	
観光 レクリエーション	森とのふれあい	親水とレクリエーションの場		庭園鑑賞	農景观形成、農体験	観光情報発信	おもてなしの空間 庭園鑑賞
投資と雇用	最先端技術による維持管理			園芸分野の領域拡大(アート連携)	スマート農業、地産地消、新品種	生産品の加工 地域オリジナルブランド化 花と緑の領域の拡大	
				農福連携			
農業と林業	間伐体験、森とのふれあい			園芸産業振興	スマート農業技術	間伐材利用、木材利用	
健康と福祉	森林浴、森林セラピー	水とのふれあいによる心と身体 の健康回復		農福連携、花とのふれあいによる 心と身体 の健康回復	収穫体験、土とのふれあいによる 心と身体 の健康回復	収穫物の加工体験 食育・食による健康	心的ストレス緩和
環境教育	木育、森の幼稚園	自然観察		花壇づくりを通した 環境教育プログラム	生産体験、収穫体験		伝統文化の継承

(3) グリーンインフラ展示の具体イメージ

- 会場内に実装するグリーンインフラについて、来場者が興味・関心を持ちながら学び、体験し、自分ごととして捉えることができるよう、体験型のグリーンインフラ展示を行う。
- ハード・ソフト両面で体験ができるよう展示設備、コンテンツを整備する。

【地下水流動の可視化】

- 地上の様子（模型、航空写真等）に地下水の流れを投影。
- AR/VR等を活用して自身が立っている場所の地下水流を体験・体感する。



【地表水と地下水の可視化・体験イメージ】

【生物多様性ワークショップ】

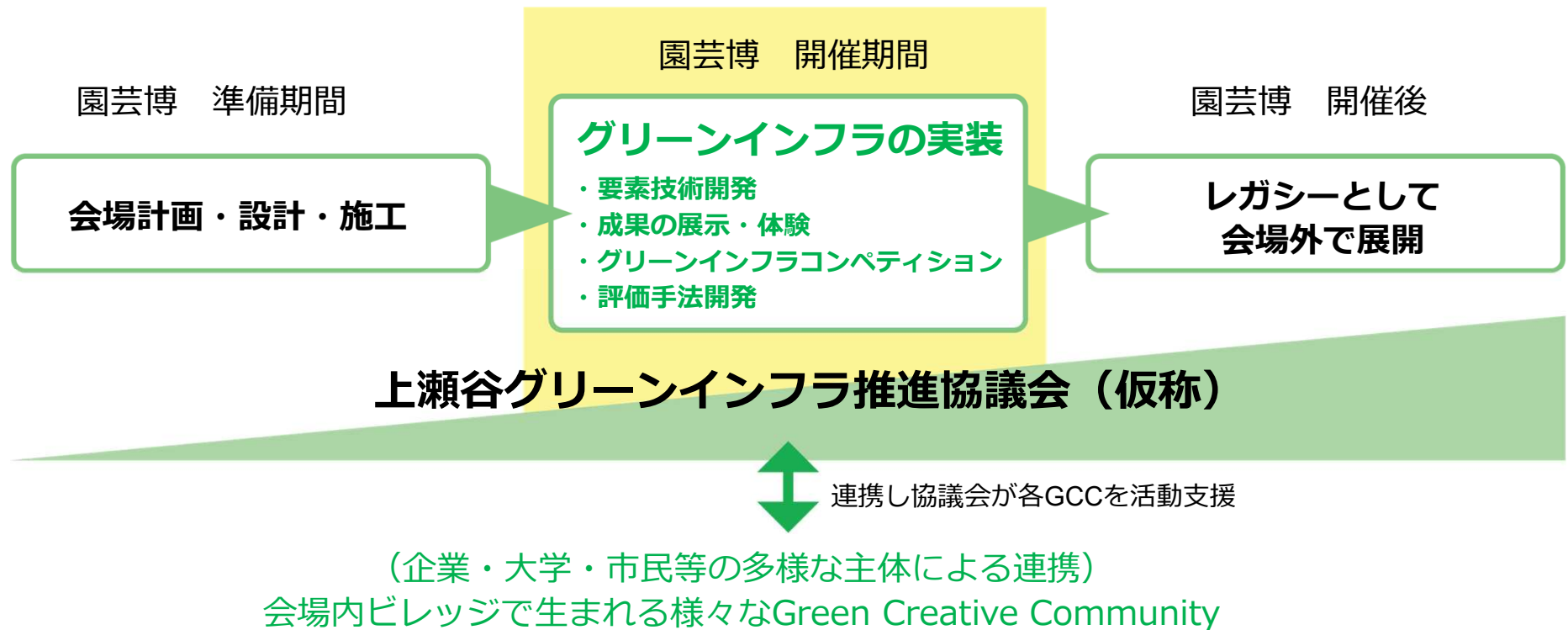
- 上瀬谷の多様な生物、林、森の植物、農環境を体験できるワークショップの実施。
- 微生物や菌類等、目に見えない生物を学び、体験できる施設の展開。



【生物多様性ワークショップイメージ】

(4) 本博覧会を契機としたグリーンインフラの展開の考え方

- ・博覧会で実装したグリーンインフラは、一過性ではなく、博覧会を契機として広域普及、技術進化、発展等を期するものであり、実効性のある展開には、それを支える推進体制や関係者の意識変革が必要。
- ・そのためには、開催前から推進組織を設置し、博覧会開催を国際的な実験場とし成果展示の場として位置づけ、開催後はレガシーとして継承し、広域普及を目指す。



- ・都市公園施設として整備される「屋内展示施設」において、当協議会の活動を継承発展
- ・博覧会レガシーとして、まちづくりにおけるグリーンインフラ実装に関する活動支援、情報発信の拠点として機能

(1) 動線計画の考え方

- 動線は、ICT等の先端技術等を活用し、**安全性、快適性、移動負担の軽減などの機能**を持たせる。
- 展示された**花や緑を愛でながら移動自体が楽しみになるような計画**とする。
- 会場内の動線は、その**用途別に、来場者用動線、管理用動線、緊急用動線、VIP用動線に分けて整理**する。



(2) 来場者動線

- 来場者動線は、「歩行者動線」（「主動線」と「副動線」）、「パーソナルモビリティ」、「大量輸送の電動トラム等」により構成。
- 平坦路とスロープにより構成し、移動手段として歩行の他に複数のモビリティの導入により容易に移動可能なものとする。また、電動カートやベビーカー・車椅子の利用者への配慮や景観保全を踏まえた通路幅とする。



<幅員の算定>

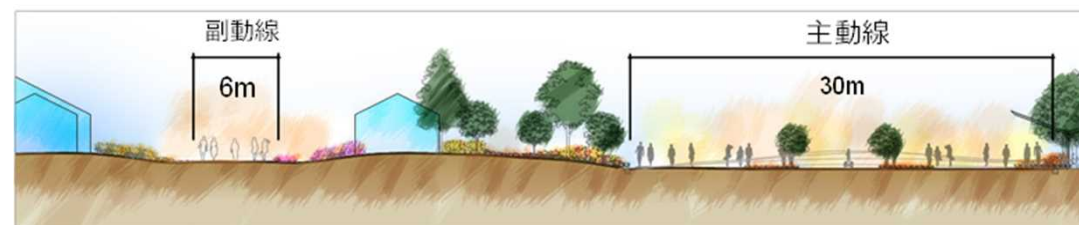
- 主動線は、歩行者動線、緑地、溜まり、パーソナルモビリティ動線が複合したものとし、会場内の中心に通景軸として計画し、移動自体が楽しみとなる景観演出と、想定来場者数を踏まえた混雑時においても快適且つ安全に移動できる幅員として30mに設定する。
- 副動線については、サービス水準の確保や自然や建築を楽しむヒューマンスケールな散策路の役割を満たすために幅員は6mとする。

<Villageへのアクセス>

- Villageには副園路よりアクセスする。
- 主動線とVillageには植栽や花壇等の演出により主動線から引きをとり、Village内のテーマ性が主動線より垣間見ることが出来る配置とする。



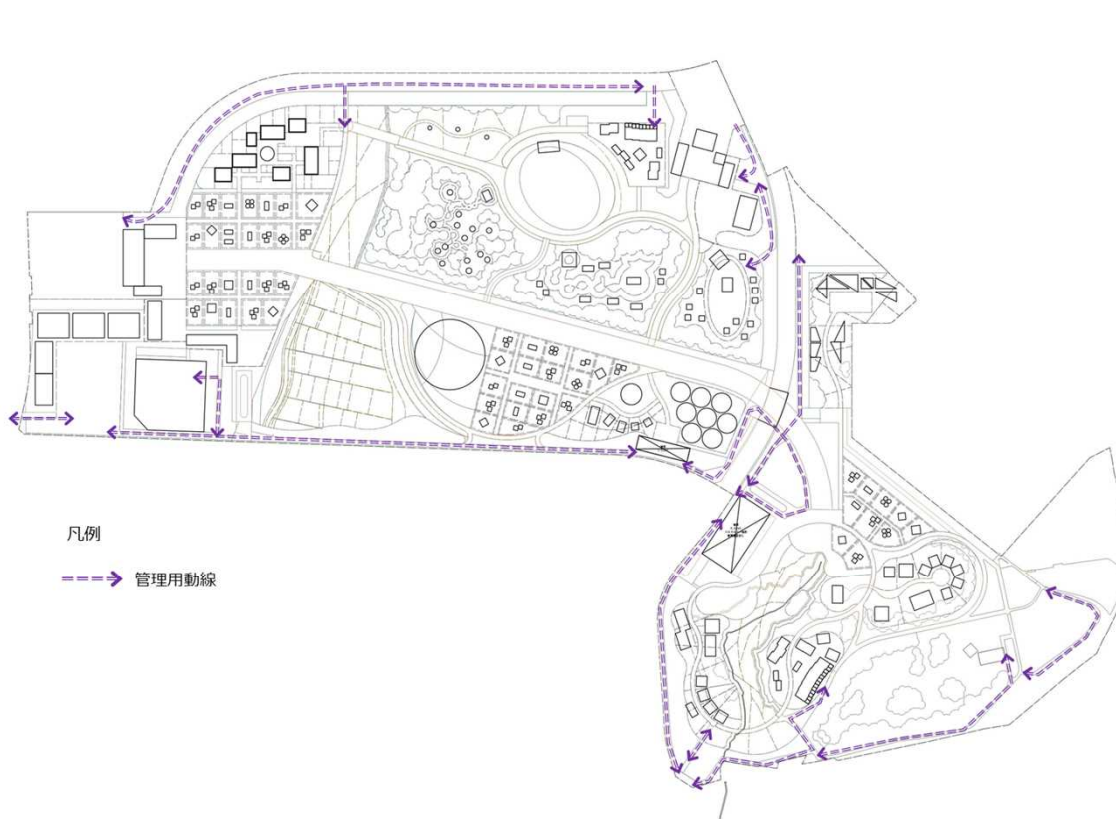
【主動線、副動線とVillageの関係（平面図）】



【主動線、副動線とVillageの関係(断面図)】

(3) その他動線（管理用動線、緊急用動線、VIP用動線）

- **管理用動線は、原則として、来場者動線と分離し、各パビリオンや施設へ直接搬出入ができるよう設定する。**また、園内からは管理用動線が見えないよう樹木による目隠しや盛土によって景観上の配慮を行う。
- **緊急用動線については、すべての動線を通行可能とし、消防車輛、救急車輛が十分通行できる幅員と多方面からアプローチできる動線を確保する。**
- **VIP用動線は、原則として、来場者動線と分離するが、来場者動線の使用が必要となる際には、観客とVIPが交錯しないオペレーションを事前に想定しておく。**



【管理用動線】



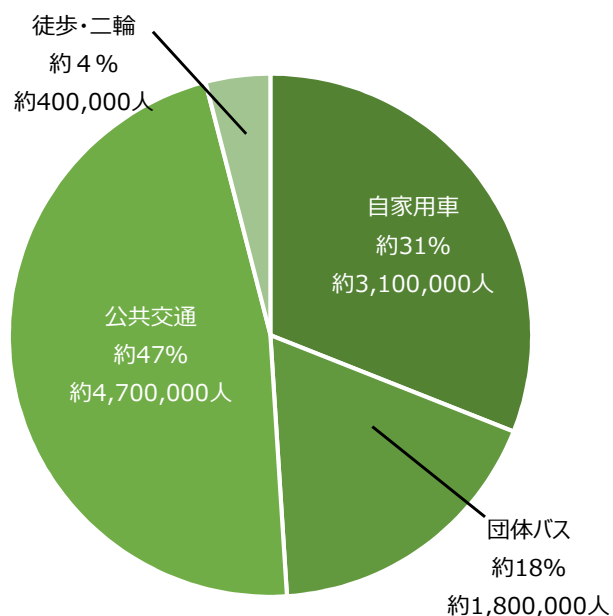
【緊急用動線概要】

5 輸送計画（輸送アクセス検討）

（1）来場者の交通手段について

- 交通分担率は以下のとおり。

【交通手段の分担率及び手段別来場者数】



【交通手段別の平日・休日、1日上限来場者数】

	交通機関別入場者数						総入場者
	自家用車		団体バス		公共交通	徒歩・二輪	
	人数	台数	人数	台数	人数	人数	人数
平日平均	約13,300人	約4,430台	約9,200人	約260台	約21,500人	約1,900人	約45,900人
休日平均	約24,800人	約8,270台	約11,200人	約320台	約34,600人	約3,100人	約73,700人
1日上限	約40,400人	約13,470台	約7,500人	約220台	約47,800人	約4,300人	約100,000人

※今後、交通事業者等との協議により変わる場合がある。

（2）輸送アクセス（案）

公共交通

- 複数の鉄道駅に囲まれた特性を活かし、新たな交通および会場周辺の各駅からのシャトルバスによる輸送を基本とする。
- 鉄道駅からのシャトルバス発着場については、特定の路線に集中しないよう、分散を考慮して選定する。

自家用車

- 公共交通への転換を促し、自家用車による来場を抑制することで、周辺道路渋滞を緩和。
- 上記に加えて会場外駐車場を整備し、「パーク&ライド」を実施。
- 世界的な電気自動車シフトの動向を踏まえ、会場駐車場については、環境配慮型の車両（EV、FCV）を優遇するなど、カーボンニュートラルに向けた取組促進を促すとともに、その他の車両についても事前予約を導入するなど、円滑な誘導と会場周辺の渋滞対策を含む環境対策を図る。

団体バス

- 修学旅行や観光ツアー等による来場者を考慮して団体バス等の駐車場を整備
- 自家用車駐車場と兼用するなど、効率的な運用を図る。

（例）利用客の傾向に合わせた駐車場運用

平日：修学旅行等の学生等を考慮（団体バス増、自家用車減）

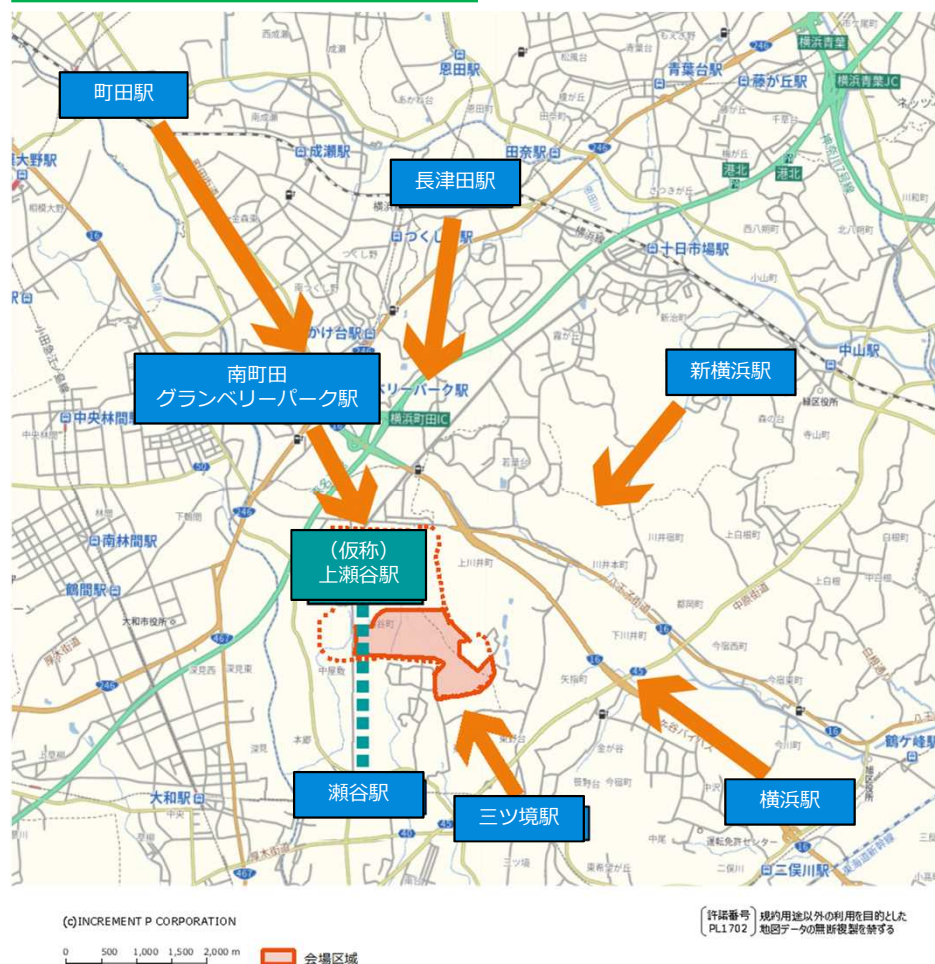
土休日：自家用車利用客を考慮（団体バス減、自家用車増）

※両駐車場の最低台数は常時確保し、開催中の来場者傾向に合わせ運用する。

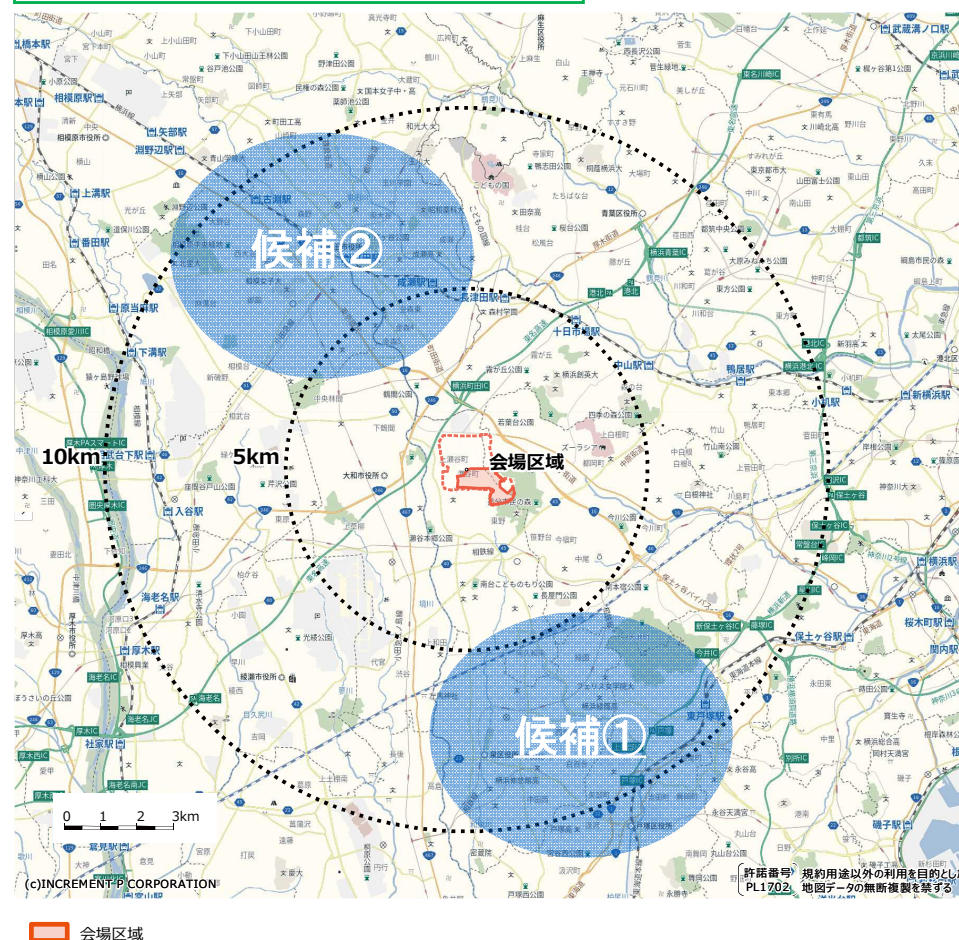
5 輸送計画（輸送アクセス検討）

- ・会場内には、団体バスや障がい者用をはじめ、自家用車用の駐車場を整備する。
- ・会場に隣接する駐車場の台数は約3,000台を想定しており、これ以上の需要に対応するために、会場外駐車場整備も併せて行い、会場までシャトルバスを運行する「パーク&ライド」を実施する。（2か所、合計約2000台）
- ・各駅（6駅想定）からのシャトルバスの運行にあたっては、効率的な運用となるよう、鉄道事業者及びバス事業者との連携を図っていく。

シャトルバス発着候補駅



パークアンドライド駐車場候補地



※駐車場及びシャトルバス発着駅に関しては調整中のため、変更となる場合があります。

6 コミュニケーション計画 具体的な取組 (1/3)

(1) 認知度・参加意欲の向上（2021年～2024年（博覧会開催3年前まで））

取組方針

- ・本博覧会の認知度を高める
- ・本博覧会に対する地域住民の理解を深める
- ・コロナ禍で得た知見を活かしたコミュニケーションを実施する

■ターゲット別主要な取組（例）

来場者	 ○重要なターゲット 花・緑、園芸等に関心のある方々、市民（国内）、学校（教育機関） ○主なチャネル・方法 ・花・緑などに関心の高い層がアクセスするメディア等への露出 ・SNSやメディア等を通じた、ロゴやキャラクターデザイン等を活用したPR ・市民参加型アートイベント等の実施や教育委員会等と連携した取り組み
出展者	 ○重要なターゲット 公式参加国、日本政府・横浜市（各区局）・都道府県等自治体 特に農業・園芸・造園関係者、民間企業等 ○主なチャネル・方法 ・AIPH・BIE総会、フロリアード2022等の博覧会や国際会議におけるPR ・本博覧会のテーマ・サブテーマ等を共有し、ワークショップを開催
支援者	 ○重要なターゲット 市民・市民団体（特に農業関係者・公園愛護会等） ○主なチャネル・方法 ・講演会・説明会等を実施し、本博覧会のテーマ・サブテーマ等を共有し、地元の理解を獲得 ・多様な主体による連携を推進するワークショップ等の双方向コミュニケーションにより当事者意識を醸成

小学校と連携した手形アートの実施（2021年2月26日）

- 子供たちの手形で花を描く“みんなで咲かせる手形アート” 制作中
- 3月中旬に瀬谷駅南口建設仮囲いに展示予定（～4月ごろ）



地元小学校での作品制作の様子

(2) 参加機運の醸成・参加の実現（2024年～2027年（博覧会終了まで））

取組方針

- ・定期的にコンテンツを広く発信する
- ・参加国間の調整や出展のフォローを行う
- ・支援を促進させるインセンティブを与える

■ターゲット別主要な取組（例）

来場者	 ○重要なターゲット 市民（国内、海外） ○主なチャネル・方法 ・大阪・関西万博と連携し、広報PR、イベント等を実施 ・横浜トリエンナーレとの連携、プレオープン等のイベントを発信 ・広域の対象にはオンライン配信等により会場内の様子をリアルタイム公開
出展者	 ○重要なターゲット 公式参加国、都道府県・市区町村（横浜市以外）・姉妹友好都市、農業・園芸・造園関係者等、民間企業、大学・研究機関、市民団体 ○主なチャネル・方法 ・参加国等会議、国際コンテスト委員会を開催し、出展内容等を調整 ・リアル/オンラインによる会議・個別訪問を実施し、出展意欲を向上 ・各出展者における広報PR（一斉広告等）の支援を実施
支援者	 ○重要なターゲット スポンサー・産業団体、メディア・輸送機関・旅行代理店 ○主なチャネル・方法 ・スポンサー等へ個別訪問を行い、自社HPにおける情報発信など、インセンティブを付与し、支援を強化 ・動員数を増加させるため、メディア・輸送機関・旅行代理店と連携し、コラボした広報やタイアップを実施

(3) レガシーの継承・発展（2028年～（博覧会終了以降））

取組方針

- ・本博覧会成功への感謝を各方面に伝える
- ・多様な主体による連携の取組を継続・発展させ、社会課題の解決に向けた取組を促す

■ターゲット別主要な取組（例）

来場者



○重要なターゲット

国内外の参加者

○主なチャネル・方法

- ・参加頂いた国内外の方々に感謝の意を伝え、また、博覧会の成果を報告する広報を実施
- ・招致決定から閉幕までの足跡を、公式記録として編集

出展者



○重要なターゲット

国内外の出展者

○主なチャネル・方法

- ・出展について感謝の意を伝えたくて、博覧会の成果を報告
- ・海外から参加頂いた国や地域、国際機関、企業等に向けた個別に謝意広報（国と連名でお礼状を送付、等）を実施

支援者



○重要なターゲット

多様な主体による連携の参加者

○主なチャネル・方法

- ・支援について感謝の意を伝えたくて、博覧会の成果を報告
- ・多様な主体による連携の取組をレガシーとして残すため、引き続き事業の推進・拡大を促進するよう引き続きコミュニケーションを実施

- 日本・横浜をモデルとしたグリーンシティの展開や、博覧会が行われたことを象徴する公園施設やアートなどを有効活用しながら継続・発展されていくことなど、レガシーの方向性を想定しながら、本博覧会のプロセスを進める。

(1) 博覧会レガシーとしてのグリーンシティ

- 「心の豊かさや幸せがあふれる持続可能なグリーンシティ」を郊外部活性化の都市モデルとして発信するため、横浜の市民力を発揮したグリーンコミュニティの醸成やグリーンインフラの実装を見据えた開催準備段階からの産学官連携や整備調整を行っていく。
- グリーンインフラの質を発展させるため、要素技術の開発とその情報発信、コミュニティ醸成の場として、自然と触れ合う体験や環境学習の場の提供。
- 上瀬谷地区のグリーンインフラを発展させる官民連携の取組として、グリーンインフラ推進協議会を設立し、取組を国内外に発信する。
- グリーンインフラを維持・管理する地域コミュニティの活動素地を活かし、Villageにおいてコミュニティの多様化・高度化を進め、レガシーとしてよりよい未来を創る主体（グリーンコミュニティ）を育てていく。



グリーンインフラのイメージ



グリーンコミュニティのイメージ

(2) 将来公園における博覧会レガシーの展開

- 博覧会で目指す未来像を取り入れた公園整備を実現するためにも、博覧会事業は公園整備と連携して取り組んでいく。
- 屋内展示施設を活用した国際コンペティションを日本に定着させ、上瀬谷アワードをブランド化し、花き・園芸・農業を発展
- 小催事場をオフィスや交流拠点として活用し、上瀬谷の自然や農、実験的に導入する高速情報通信などの環境を活かした、都市近郊における「農のある暮らし」を上瀬谷から発信
- 公園内や周辺農地との連携による収穫体験や栽培研修など農と触れ合う場を提供することで、人々が自身の身近な生活に農を取り入れるファームिंग（Farming）を流行させる



コンペティションのイメージ